あさひまち
水田ふう個人通信
N-no.2 1975.3
大阪市あべの区 旭町
2-12-2 泉原文化

WRI

WRIというのは、非暴力主義をかかげる反戦国際組織（戦争抵抗者インターナショナル）の略称。あさひまちは、私がいま住んでいる、かまがさきのいわば山の手にあたる町名です。個人通信にはちょっとおかしいかんじだけど私としてはこれにいろんな意味をこめたいというつもりなのです。この通信がひとつのキッカケになって仲間ができたらうれしいと思います。不定期ですがいまのところ続けていくつもりです。

あなたも私におたより下さい。その時ノリと仲良しの切手のカンパをいっしょにお願いします。

（風）

釜ケ崎越冬テント村の八日間、（上）

はじめに

一月五日から十三日迄、日曜を除いた八日間、私は「釜ケ崎越冬闘争実行委」が設営したテント村に通いました。といってもIくんの助手ということで、医療センターへ受診者といっしょに行って、受診カードを書いたり、病気で寝る所もないという人に対して、更生相談所にいくように、その道案内をしたにすぎません。

テント村は、十二月二十八日、四条ケ辻公園で、昼と夜の二食の炊き出しからはじまりました。

しかし、釜ケ崎越冬闘争の今年の重点はテント村にあるのではなくて、「日刊えっとう」を読むかぎりでは、行政が、正月アブレた労働者の為に用意した無料宿泊所（数ケ所に分散して、三千床といわれる）での現地闘争に主力がおかれたようです。例えば、テント村に集った仲間に、「仕事がなく、泊る所のない人は、更生相談所へいって無料宿泊所を紹介してもらおう」と呼びかけ、ついで、天満、港湾、信太山その他の宿泊所に現場を移して、「定員をふやせ」「待遇をかえよ」「仕事をよこせ」「仕事があるまで宿泊期間を延長せよ」などの要求のもとに、デモ、団交、集会などの闘いが連日機動隊に守られた行政側と展開されました。（その間の逮捕者は、のべ十四名）

また一方、テント村は、「今年の越冬は最低限の準備しか出来なかった。そのためテント村の運営もうまく進んでいない。昨年も炊事班の人が医療の代行をせねばならなかった。会場の設備も補修が必要となっている。事務局の人が不在のため、円滑に運ばない。等々の問題が出ている。テント村はかろうじて体裁をとゝのえているだけなのだ・・・・」（日刊えっとう・一月二日号）というのが実情であったと思います

しかし、期間中の私は、そのようなことの背景をほとんどしらずに、やぶからぼうにとびいりで、たゞ医療のみに自分の仕事を限定して手伝ったということがあります。

だから、それらの問題の全体をふまえないで、くぎられた私の小さな経験と見聞の、しかも途中からの八日間の感想は、ずいぶん一人よがりの点が多いでしょう。

しかし、あえてこれを書きまとめようと思ったのは、この期間中にうけとめたことがらを自分自身にはっきりさせておきたいと思ったことゝ、いろいろなおもいをさせ厄介をかけたIくんや、実行委の人、医療センターのみなさんに、この一文を書くことで、お礼にかえたいというふうに思ったからです。

でも書きはじめたら、どんどん長くなってくるし、途中でシンドクなってしまったヨ。

水田　ふう

ついしん

これを読んで下さった方へ。どんなことでもいいです。かんじたことを聞かせて下さい。自分の考えをすゝめていくちからにしたいと思います。

① 軽薄助っ人の弁

正月そうそう、今年はえらいこと（？）になってしまった。ハズミというのは、ほんまにおそろしいで！

正月四日、十時すぎ、アルバイト先のうどん屋から帰ってきて、着がえをしながらふと目についた「日刊えっとう」。それがそもそもの事のはじまりだ。夕方K君が、留守中にとどけてくれたものらしい。

「日刊えっとう」というのは、カマの活動家を中心とする釜崎越冬闘争実行委員会と、日刊えっとう社が、テント村をやっているその期間中、毎日発行しているガリ新聞。

二十八日の分から、今日までのやつ八枚。おもわず手にとって、たたみに坐りこんで読んだ。

「ふうーん、やってんだな、がんばってんだなあ・・・」

そのうち、後記や余白のところに「ガリキラー募集」とか「人手求む」とか書いてあるのが気になりだした。

私は、カマのはずれの旭町に、去年の十一月から住みだしたんだけど、ほとんどカマとは無関係だった。もっともMさんの友人で、カマでアンコをしていて、いまは物書きのTさんや、釜崎救援会の中心のIクン、その他その周辺に住んでいる二、三のひとの顔ぐらいはMさんを通じて知っていた。だから越冬闘争のことも少しぐらいは聞いて知っていたんだけど・・・

でも、どうしてだろうな。山谷や寿に行ったときもそうだったけど、友だちが住んでるから「ちょっと遊びにきたよ」なんて気楽に行ってたけど、カマ―越冬闘争ときくとやっぱしなんとなしにコチコチになってしまうのだ。

それにIクンなどは前にこんなことを言っていた。

「女というだけで、こういう場所にこられると困るのだ」そんなことも頭に残っている。

で、なんとなく、「えっとう」のことも遠くで知らないふりをしていたのだった。

しかし、「日刊えっとう」を見ると、やっぱし人手は必要としているみたいだ。K君も手伝うとか言っていた。毎日、新聞を

発行するというだけでも大変なことにちがいない。近所に住んでいるのに、知らんふりなんかしないで、私もやっぱり手伝いにいこ。越冬闘争に参加するなんていう大それたもんじゃなくて、知りあいのよしみで何かできることを、とそう思った。実際的にもIクンたちの手伝いをする以上のことは何もできずに終るだろうけど。

ケイハク助っ人、いざいかん

まずIクンのところへ電話をする。出ない。彼がよくいってる飲み屋にいってみる。あいにくと、そこはお休み。仕方がない、とにかくテント村に行ってみることにするか。

シャツ二枚にセーター二枚、その上からダボダボのジャンパーを着こんで、コロコロになって暗い町中へとびだした。時はすでに十一時半。

しかし待てよ。テント村に直接いく前にTさんに様子を聞きにいこう。

Tさんの部屋をたたくと、意外にも好都合にというかIクンがそこに来ているではないか。

「日刊えっとうを読んだら、人手が欲しいと書いてあったけど、私もなんかやることあったらやるけど」と言いだすと、二人ともなにやら困ったというふうに顔を見合せた。

「日刊えっとうというのは、テント村で闘っているカマの人たちに対しての新聞であって、外部の人間に対してのもんじゃない。」

「人手求むというのは、だからカマの労働者に対してのことで、今年は外部からの支援は拒否しているんだ。」

「去年は、女の子がたくさん支援できていたけど、労働者物神主義というか、へんな親切をふりまわして困ったんだ。」という。

それで、「私もIクンが前に女はうんぬんと言ってたこと覚えてたから、少し遠慮してたんだけど・・・女が現場に行って都合が悪いのなら現場に行かなくてもできることがあるんじゃない。たとえば、去年は子守してて山谷にはいかなかったけど、自分が住んでる近所をまわって古着を集めた。一人でも集めようと思えばけっこう集るよ。

そういうのはどうだろう。」

「衣類はトラック一台分ぐらいある。だからもう集める必要はない」という。

「じゃ・・・印刷の手伝いは？」

「ガリの手伝いといっても、あれはLくんが自分一人できっちりやらないと気がすまない性分で、やることないよ。カマの労働者が手伝うと言ってくれれば、それはLくんでもガリ切りを教えていっしょにやると思うよ。まあお茶を入れるぐらいだなあ」

「洗たくなんかは？うち洗たく機あるから着がえたものを持って帰って洗たくするよ。」

「そんなことやりだしたら、とってもきりがないし、やりとおせないよ」・・・というような調子なのだ。

せっかく胸いっぱいにふくらませた空気がだんだんとしぼんでいく。

それで、不満そうにじっとIクンを見つめていると、

「まあ、今やれることは、医療センターへテント村から連中をつれていくんだけどその僕のヘルパーの仕事ぐらいだな、宿泊所はまだあいているんだ。それを満員にするくらいつれていかないと、来年またしめつけてくる。

そのためにまず医療センターにはなるべくたくさんつれていかなきゃだめなんだ」

「ヘルパーって？」

「僕のいうとおりに動くことデス。月曜朝八時ごろにテント村に行ってれば九時ごろからはじめる。やる？」

それにそえてTさんが、じょうだんのような真面目なような口ぶりで、

「君なんかまず涙線をしめていかなきゃだめだよ。そいでねえ、ホントにやるつもりなら、まずあしたは目がさめたらすぐテント村に行って、みんなと同じように腹をすかして、一日たき火にあたってみることから始めるんだな」という。

「いまからテント村にいくんなら、おともしてもいいですけど、行ってもみんな寝てるし、何もないですよ。」ということなので、ともかくこんばんは帰って、しかしあしたは早く起きて、たき火にあたりに行くことにする。そして、月曜日からはIクンの助手をやることに決めた。

話を終ってまたそろ暗い夜道を小走りに家へ帰って行ったのは、もう夜中二時をまわっていた。

しかし、どうも釈然としないのだなあ。別にIクンやTさんの話のどこがどうというのではないのだが、なんとしてもひっかかるものがある。

なぜだろうか――（あたしゃしつこいのだ）いろいろ考えてみた。

そもそものはじまりは、知り合いが越冬をやってる。知らんぷりはよくない――という気持からだった。

それが話の調子で、「どうしてもいくんだ」といったまるで押しかけのような形になって、まことに変テコリンな気持なのだ。

もともとケイハク助っ人を以って自任する私だけど、ほんとうは越冬を手伝うなんて申し出るのは内心とてもはずかしい気持だった。

つまり……いまのカマのドヤは、ほとんど改築されて鉄筋になっている。

「○○ホテル」などとネオンがついていたりして、入口なんか立派なものである。＜労働福祉センター＞にしても堂々としたビルだ。耐用年数五十年とか。五十年どころか百年も持ちそうだ。ということはカマは、少くともむこう五十年は変らないという見とおしがあるということになる。

資本やいまの体制は、それだけ長期にわたってカマを必要としているということになるだろう。

こういう状況の中での長いカマの闘いがある。

「えっとう」というのも、そういう中での日常的な闘いを土台にして、はじめて成立している。私のようにたかだか一週間ほどの期限つきで、その場限りのことをやって、ハイおしまいでは無責任きわまりないということになる。

そんな私の「えっとう」の手伝いというのは、つまり新左翼ばりに言うと、＜自己の位置づけ＞が、非常になんというかあいまいで、まさにケイハクを絵にかいたということになる。

だから私が助っ人を申し出ながら抱くはずかしさというか、うしろめたさは、第一にIクンたち、いま現に闘っている人たちに対して、第二にカマの労働者に対しての自分のあり方から出てきていると思う。

また自分がいまゝで見ないふり、知らないふりをしていたことに、いやおうなく当面せざるを得ない。少くとも自分はぬくぬくとめしを食っている。めしもろくろく食えぬ状態にいる人たちの前で、私はいったいどんな顔をすればよいのか

そんな新しい事態に対する＜不安＞＜とまどい＞＜おそろしさ＞みたいなものは、当然私を引っ込み思案にさせ、行動をにぶくさせる。それを打ち破るのが私のあえていう＜ケイハク＞さなのだが、そのケイハクは、また＜うしろめたさ＞＜はずかしさ＞をよびだすものであり、決して私を安心させるものではない。

しかし、こんな私の気持などIクンたちが知るはずもないけど、こちらの受取り方が少しひがみっぽいのかもしれないけど、Iクンの私に対する態度はようするにクロウト対シロウトというかんじなのだ。

Iクンは労働者とつきあうのに、

「なぐってでも言うことを聞かすということが、あんたにできるか」と言った。

私にそんないい方をする時、Iクンたちは、私と面識のある知人ではなく、まさにオレはカマの人間だと自任し、その代表としての口ぶりになっているという気がした。

そして、「まずたき火にあたってから」というのは、こういうところから出てくることなのだろうかと思った。

これは、私の〈はずかしさ〉の内容と重なるものだけど、まずみんなと同じようにたき火にあたったとしても、同じにはなれないのに仲間みたいな顔をするほうが私なんかイヤだなあ。

私はなにも変装までしてやるつもりはないんだ。分そうおうに、せまく、小さく限定した部分での手伝いしかできない。それは私にとってはずかしいことだが、そんな手伝い方というものも、運動をやっている側で受けとめていかないと運動は拡がっていかないんじゃないか。

しかし、いまここで問題なのは、〈はずかしい〉と思いながら、なぜあえて私が越冬闘争を手伝おうとするのか——ということだ。

つまり私がケイハク助っ人に固執するのは、たとえ目には見えなくとも、自分が反権力というか、そういうものの側の仲間であると意識する時、その思いの内容はそれぞれに、カボチャとスズメぐらいの違いがあるのかもしれないけど、たとえ片思いに終ろうと助っ人としての主体的ないき方というのはあると思うからだ。

とかなんとかえらそうなことゆうたけど実際にはまあいきがかり上というか、意地になってといおうか、そうはっきりとつかめない感情的なものが、だいぶん働いて私の行動の源動力になっているようです。

ケイハク助っ人が、なにやら理屈っぽいことになってしまってへんな具合だが、まともかくあしたから行くことに決めたんだから、ともかくもう寝ようとふとんに入ったのは四時をすぎていた。

②まずたき火にあたって

日曜日（一月五日）くもり

寝たのが四時すぎだったので、六時に起きるつもりが七時になってしまった。

Tさんがテント村まで案内してくれるという約束だった。部屋の戸をたゝくとTさんはまだ寝ていた。仕方ないのできのう聞いていた道をズンズン歩いた。

ほっぺたがつーんとしてくる。ほんとにこの道でいいのかなあ……踏切りをわたって、それから……なんせまっすぐまっすぐいきゃあいいんだな……ガードがあるはずだよ……あっこと通ったことある両側にポルノとヤクザ映画のポスターがびっちりはってあって、頭がつっかえそうなガードだ。しょんべんガードとかいうんだ。ほんとにそのガードをさかいに、しょんべんくさーくなる。

人は、まだあんまり歩いていない。わりと広い通りが縦と横に走っている。そこをまたまっすぐいく。道の両側はほとんど

ヤだが、一見ホテル風。・・・高架線がみえてきた。あのすぐむこうだな。

ここだ。ここだ。ちっちゃな公園。入口にしょぼんと赤旗がたれている。

入口のすぐそばにたき火があって、五、六人の人があたっていた。みんなが私を見ている。はいりずらいなあ。両手をポケットにつっこんで、なにくわぬ顔をしてさっと入る。

テントが二つ作ってある。たき火は公園のあちこちに五つくらいあって、みんながそれを取りかこんでいる。煙がにおってくる。女は一人もみあたらない。早くどっかに落着こお。どこがいいかなあ・・・一番火がよくもえている向こうのたき火に近づいていった。

だまって手をかざす。まだ朝がはやいから、みんな半分うつらうつらしている。

タオルで顔をつつんで、亀みたいに首をちゞめて坐って腕ぐみしたまゝ眠っている。めずらしそうに私の方をチラッチラッと視線をむける人もいる。だけど、話しかけてくる人はいない。なんとなく落着かないのだが、たき火からちょっとでも離れると、とても寒いので、足の林にもぐりこんでじっとすくんでいた。

ドロドロになったズボン。うわあ、このおじさんの足、なんてむくんでんだろう。丸太ん棒みたいだ。それになんと素足。おそるおそる顔の方を見ると鼻からほっぺたにかけて刀傷みたいのがある。ずいぶんすごい顔だ。手を見ると両方の小指が途中からない。昔、やくざだっだのかもしれないな。

そのうち、だんだん暖まってきて、気持ちよくなってきた。寝不足で眠気がさしてくる。私も、年取ったらやっぱしこんなとこで、たき火にあたってんじゃないかしら・・・などと、ぼんやりと思いながら、たき火を見ていた。・・・

と誰かがテントの方から大声で

「自分達の公園は、自分達の手できれいにしよう」

「そうじをしてから、たき火にあたって下さい」

ほとんどの人は、たき火のそばから離れようとしない。私だってせっかくあったかい火のそばから離れたくない気持。それでしらんふりをきめこんで、たき火にあたりながら、そうじをしてる人たちを見ていた。

たき火の火が少し弱くなってきた。たき木をほうりこまなきゃあ・・・と思うのだけど、誰も立上ろうとはしない。どうなんのかなあと思っていると、どこにでもマメな人はいるもんだ。若い男の人がどっからか大きな木を持ってきて割りだした。

それにしても、いつまでここにいようかなあ、この調子でいればいくらでもぼんやりと時間が過ぎていくばっかしで、おんなじことだ。「まず、たき火にあたってみる」ことの意味は何なんだろうか・・・なんて思案していると、さっきそうじをしようと号令を出した人が、おじいさんと手まねで話のやりとりをしながら私のとなりに入ってきた。おじいさんは、おしらしい。板をもってきて腰を下ろす。私を見つけると、おまえもすわれという手つきをする。

誰かが彼に「いつもおんなじ人ばかりテントで寝ている。他のものにもかわってくれるように言ってくださいよ」という。

「まちがってもらっては困る。今年のテント村は、寝とまりするところではないんだ。テントは寝るとこじゃないんだよ。去年とは違うということをはっきりみんな自覚して、闘いにのぞんでもらいたい」というドスのきいた答だ。

「だけど・・・」とブツブツ言いながら黙ってしまった。

彼はおしのおじいさんと手まねでやりとりしている。しかしよく見ると、その手まねは、同じしぐさのくりかえしだ。

そのうちタバコをとりだした。私にもすわないかとすすめる。私はなんとなく声をだすのがおっくうで、のどを指さして、顔をゆがめて首を横にふった。「ぜんそく気味で、のどが痛いから吸わない」というつもりだった。

ところが彼は、おしのおじいさんと手まねでやっていたせいだろう。てっきり私をもおしだと思いこんでしまったらしいのだ。さあ、それからがたいへん。親指をたてて自分をさし、小指をたてて私をさし、にっこり笑ってりょう腕を胸にあてて交差させる。「仲良し」という意味なんだろう。それをなんべんもなんべんもやる。とうとう私はおしになってしまったのだ。

それから、おもむろに自分のコートを脱いで私に着せかけてくれる。断っても断ってもかけてくれるので、仕方なくコートをはおっていると、こんどはまたていねいに前にまわって、ずり落ちもしないのにコートの前をあわせてくれる。それをなんどもなんどもやるんでまいっちゃうよ。私を「ふびんなおし」と思ってだろう。それはもりほとけさまのようなやさしさの顔つき。しかしいくらなんでも、このしつこさにはへいこうする。まわりの人も「そうか、おしなのか。かわいそうに」といった風でこっちを見ている。

私はだんだんイライラしてきて、彼の方を見向きもしないでその親切を拒絶した。

彼の方もイライラしてきたらしい。

「ああ、俺に手話が出来たらなあ」

「どうしたら通じるんだよう」とどなりだす。

しかし、今さら声を出すわけにはいかない。と、突然「チキショウ」と大声をだした。と思ったらたき火の入れものをけとばした。

火があたりへパアッと散る。まわりの人は驚いてよける。さわらぬ神にたたりなし……

ちょうどそこへ、人の顔ほどある大きな魚の頭をのせた自動車がうしろを通ろうとした。支援の人らしい。

「おい、こんなとこ通るな。じゃまやないか。」すごいケンマクだ。

車を運転してきた人は、彼をよく知っているらしいかんじで

「Aさん、まあそう荒れるなよ、ちょっと通してくれよ、すぐすむから」となだめる。（彼はAという名前なんだなと、そのとき判った。）

「早よやらんかい……」

どうも私がこれ以上ここにいると、ろくなことになりそうにない。

これを潮に帰ることにした。

※　※　※

公園を出る。来るときはあんなに静かだった町通りに、人がいっぱいあふれているのでびっくりした。

地べたに箱をおいて、店ができている。古着や、時計のバンドや置物みたいなものがならべてある。

なんとなく立止ってそれを見ている人や、と思うとそのすぐそばで、みぞに片足つっこんで、寝っころがっている酔っぱらいの人もいる。

テント村にいる人たちというのは、カマの中でもほんの一部なんだなあ。

それにしてもあのAさんという人は、どういう人だろう。テント村の運営に積極的に口入れしたりしている様子からは、カマの活動家というふうにとれる。革命とか、わしらカマの労働者とかいうことばをいかにも活動家らしい口ぶりでしゃべっていた。

（革命とかいうことばを使う人が活動家とは思わないが）

でもどうして彼はあんなにいばっているのかしら・・・きょうの様子からみると、しかし、それは彼だけに原因があるのではない。仲間であるはずの連中が言うべきことを彼に言わずにいることからきている部分が多分にあるように思われる。

個人的には、私やおしのおじいさんにしめしたようなやさしさが（多分におしつけがましいが）組織的なところであらわれると、全く逆になってしまうのはどういうことだろう。

きょうはまだほんの見物に行っただけだったが、さてあしたからはどないなことになるやろか・・・。

（次号へつづく）

あとがき

一月一日　考えてみると五年ぶりで、いなかで正月をむかえる。

一月二日　去年死んだ父の墓まいり。帰りひさしぶりにたづさんと。

一月三日　八時四十分発の大阪行にのる。夕方から、うどん屋にアルバイトにいく。

一月四日　東京から戸こまくんサルートンへやってくる。

一月七日　山部くん東京からたづねてくる。

一月八日　久保くんら五人と、新世界へドサしばいを見にいく。

一月九日　バイトでもらったお年玉千円と大入り千円をあわせて、レコードを買う。

一月二十日　医療センターへ破傷風の佐々本さんを見舞う。

一月二十一日　横田テープおこし終る。

一月二十二日　雪の近鉄特急で伊勢の安田リキさんを訪れる。

一月二十三日　上京、「まだ名前のない学校」に参加。坂井さん宅で。

一月二十四日　正春寺の管野スガの墓をおまいりする。

一月二十五日　石川文庫整理参加。十一時三十五分の夜行で大阪へ。

一月二十七日　佐々本さんを見舞う。

二月十四日　この日、二十八回目のたんじょう日。

二月二十一日　ひさしぶりに、いくちゃんがくる。　佐々本さんを見舞う。

二月二十三日　大阪発五時、上京。

二月二十四日　清水港へFRI号訪問。

二月二十五日　百人委員会、坂井さん宅・・・・・・

第一号を出してからすでに三ケ月半たってしまった。正月そうそうに二号を出すつもりだったのに「えっとう」だけで終ってしまったというかんじ。私の「えっとう」は十三日に終ったんだが、初めメモのつもりで書き出した記録がだんだん長くなってナント百枚にもなってしまった。

タイプを打つのがまたタイヘンなので、三回にわけて出すことにした。今回は、その前説だけ。約三十枚分。

紙面の関係で、「ひとつの共同生活」はおやすみしました。

※　※　※

「ケイハク助っ人」については、向井考さんのサルートンで、「助っ人論ノート」が出ている、あわせて読みたい方は取りつぎます。

三月九日　（風）

あさひまち
水田ふう個人通信
No 3. 1975年5月
大阪市あべの区旭町
2-12-2泉原文化

WRI

WRIというのは、非暴力主義をかゝげる反戦国際組織（戦争抵抗者インターナショナル）の略称。あさひまちは、私がいま住んでいる、釜ケ崎のいわば山の手にあたるところの町名です。個人通信には、ちょっとおかしいかんじだけど私としては、これにいろんな意味をこめたいというつもりなのです。この通信がひとつのキッカケになって仲間ができたらうれしいと思います。

不定期ですが今のところ続けていくつもりです。

それから、このたよりが郵便でとどいたら、消しゴムで切手の上をこすってみて下さい。切手は、あなたにプレゼントします。あなたとわたしの合言葉。切手にノリを！

釜ケ崎越冬テント村の八日間・中

③ 第一日目の出来事

月曜日（一月六日）　うすぐもり

きのうより、シャツ一枚とももひき一枚よけいに着込んで外にでた。これくらい着てれば、きのうみたいにたき火にばっかりへばりついていなくてもすむだろう。

きょうからいよいよ本番。八時頃にテント村に行ってれば、Iくんが来て指図してくれるはずだ。しかし、きのうの「おし」さわぎのことを考えるとなんとなしに具合が悪い。Aとかいう人、いなきゃいいんだけど。・・。かくれるように真中あたりのたき火にもぐり込む。

もうあんまりたき木がなさそうなかんじで、このたき火も火勢が弱い。

ブスブスと煙っている木の上にモチをのせて焼いて食っている人がいる。おそなえのモチみたいで、焼いても表面が硬そう。アチッ、アチッと左右の手にもちかえながら一人で食べている。他の人は、それを見ても「おい、それくれよ」なんていうわけではない。私は、ちょっと食べてみたいと思ったんだけど・・・。

ひざが痛くなってきた。よいしょっとたち上ったそのひようしに、テントの近くにいたAと目があった。しまったあ！しかしもう遅い。彼はこっちに向って歩いてきたのだ。

いせいのいい声で「おはよう」と言う。それで私もあわてて「おはよう」とへんじした。

「あれっ」と、ちょっと思ったようなかんじだったが、さほど驚いたふうでもない。

「私ゼンソクなの。たんがつまって、時々声が出なくなるんだ」と一応いわけをする。

「どっからきたんや？支援の学生さんか？」

「いいや、ちょっと手伝いにきただけ」

「このへんに住んでるんか？」

「うん」

「ふーん・・・・ちょっとコーヒー飲みにいけへんか」

「いま、ひと待ってるからダメ」
「・・・・・」「タバコのむ？」
「のど痛くなるからすわないんだ。」
たき火ですすけた青黒い顔の中から目玉を白黒させて、興味ありそうな、なさそうなようすで、まわりの人がこっちを見ている。
「あっ、Aさん」と誰かが声をかけた。
「うるさいなあ、あっちにいっとれ」
「でも、ちょっと話があるんやけど・」
「なんだよお」
「あの・・・・わしねえ・・・ちょっとこっちにきてくださいよ・・・」
「しようがねえな。ほんまに、わしゃ忙しいよ。」
「そいじゃまたな」
ヤレヤレと彼を見送って、あたりを見回す。Iクンは何時ごろにくるのかなあ。もう九時頃になると思うんだけど・・・。
と、テントの方から、マイクで呼びかけがはじまった。Iクンではない。
「いまから医療センターに診察を受けにいきます。体の具合が少しでも悪いひとは名前と年をいうだけで診てもらえるから健康診断のつもりで、一度診てもらおう」
一人、二人ポツンポツンとテントの方に集っていく。
Iクンの指図をあてにしていたので、一体私は何をしてよいのやら、こころだけがあせってしまう。
それでも十四、五人が集まったかしら。テントの中から一人をタンカーで五、六人で運びだすと、それを先頭にゾロゾロと歩きだした。
私はあわてて追っかけた。マイクを持ってた人に、
「あのー、Iクン知らない？」
「知らないよ」
「きょうはこないの？」
「さあねえ」
「私、Iクンの手伝いに来たんだけど、医療のことで手伝うことがあるということだったんだけど・・・」
「そう、じゃいっしょに来て」
「何をすればいいの？」
「どんな治療されるか視て、着がえの服がない時には、テントに取りに来てとどけてくれたらいいよ」
肩を組んでる二人づれ、かと思うと、ずっと遅れてはんてんかなんか着て一人ポツネンとついてくる人。ふりかえるとちょっとばかし異様なかんじの行列だ。
医療センターは、テント村の公園からすぐ近くで、ゆっくり歩いても七、八分だ。
センターの入口のすぐそばのコンクリートの上で、フトンをかけて寝ている人がいる。ミゾは、なにやらゴミでいっぱいだ。
ドヤドヤと入口をあけると、ねずみ色の作業服を着た男の人がすぐに出てきて、
「テントからだね」という。「上って」
二台のエレベーターにぎゅうぎゅうにつめて乗りこんだ。
五階。
エレベーターからおし出されて、ボーと立っていると、別の男の人がすぐとんできて、
「ハイ、ここにならんで、名前と年は」
と紙に次々と書き入れていく。
タンカーの人は、病院の運搬車に乗せかえられる。
「これから、たき木を取りに行くので、帰りますからたのみますね。」
「えっ。ハイ」
いま帰って行った人たちは、たぶん実行委の人たちだろう。
急に一人にされちゃって、どうなんのかしら。
看護婦さんが運搬車を運こびに来た。

「この人のこと誰か知っていますか？」
「ハイ」
私はとんで行った。
「あなたは？」とっさに
「ハイ、知りあいのものです。」と言ってしまった。
「じゃ、いっしょに来て下さい。」
たんがつまるのか、タオルを口にあててむせている。びっしょり汗をかいて、アカと脂でひどい臭い。
「ここで待っていて下さい。」診察室の前にくると、私をのこして、運搬車を中に入れる。
「あ、私もいっしょについています。」と中に入る。
去年、父がガンで死んだ時のことが頭にあった。病院というところは、なにしろひどいところだ。外科などというところは、特にひどくて、なんでもかんでもすぐ切りチャンコにしてしまう。看護婦も一見親切そうな笑顔だが、そんなものはあてにならぬ。分業化された機械のような病院に対して、私は敵意をいだいていた。
今でも父は病院に殺されたと思っている。
だから、カマの人間というだけで、きっとていねいになんか診てくれないだろうと頭から思っていた。
監視するように、病人のそばにくっついている。タオルを水でしぼって汗をふく。しかし遅いなあ、医者はいったい何しとるんだろう。
「お医者さんはまだでしょうか、熱がひどいんです。」まるで、つっかかっていくような口ぶりで看護婦さんに言う。
「いまみえますから待っていて下さい」もうヤキモキしてしまう。
ほどなく医者がやってきた。ふちなしメガネのきっと私とあまり年のちがわない若い医者だ。
聴診器をまゆをしかめながら胸、そして背中とあてている。腕をまくって血圧をしらべおわると
「乾いたタオルで体をふいて、着がえさして」
とにかく、まず服をぬがさなきゃあ。と手をかけてびっくりした。上から下までぐっしょりぬれている。それに体が硬直してんのかしら、起き上るのさえむつかしい。看護婦さんと三人がかりで、やっと上が脱げた。うわあすっごい！なんというか、ラードのような脂がアカといっしょに背中にこびりついている。とってもじゃないが、ちょっとやそっとタオルでこすってもとれやしない。こんどは下着を脱がせる。こっちの方もたいへん。たれ流しの状態でウンチまみれだ。手をこまねいているとユカタを持って、わりあいと年配の看護婦さんが入ってきた。「婦長さん」と呼ばれている。
「まあまあ、こんなになるまでほっといて、もっと早くくればいいのに」と言いながら、自分でウンチまみれの足や股をふきはじめた。
びっくりしたなあ。イヤな顔ひとつしないでこんなふうにできるなんて、えらいもんだ。
着がえがすんだら、次はレントゲン室。横になったままで撮ることができるようになっている。それはすぐに終った。再び診察室へ。
ふいてもふいても汗が流れてくる。苦しそうだ。医者が私にむかって手まねきする。
「知り合いの方ですね。」いま撮ったレントゲン写真を示しながら
「高血圧と肺炎ですね。それから右肺の下に水がたまっています。結核の疑いもあります。家族の人に連絡つきますか？かなり弱っています。ここに入院です。」という。あわてて病人のところに行って、耳も

とに口をよせて
「おじさん、誰か連絡したい人いますか」
うっすらと目をあけて、うなずく。しゃべろうとするんだけど、口が動かない。たんがでてむせっかえる。見てるのもつらい。
二、三度聞き返してやっとわかった。
「佐々本ヤエ、姉です。東京の中野のH病院で看護婦をしているんです。もう三十年もしているんです。」
早く電話をしなくちゃあ。どっかで十円玉をたくさん換えてもらわなくちゃあ・・とエレベーターで下りようとすると、相談室というところから声がかかった。
「私が所長や・・・」まるでヤクザの親分みたいな顔。どっかりとイスに坐っている。いわゆる白衣もつけていない。
この人所長？・・・
「君はあの人の知り合い？家族の人はいるのかね」
「はい、いま聞いてわかったので、それで今電話をしにいこうと思って・・・」
「うん、それはこっちでしてあげるよ」
そりゃ助かる。ケースワーカーというんだそうな。女の人が番号をしらべて、連絡をとりはじめた。
応待を聞いていると、こういうことは時々あるのだろう。てきぱきと要領がいい。
「もう十年も会っていないし、急にそんなことをいわれても困る。奥さんがいるはずですよ。こだわりがとれないので私はちょっと会いに行くわけにはいかない」という返事。
「まあ連絡しても、カマの名を言うとそんな人知らんというのもあるし、名前を聞いただけで電話を切る家族もいる。いまの人、こっちの住所ひかえてたやろ、それだけでもましな方や」と所長さん。
そうなのか・・・
佐々本さんが入院することになった七階の病室に行って
「お姉さんと連絡がとれました。だけど今仕事が忙しくてすぐにはこれないらしいんですけど・・・」と伝える。
それからテントに下着のかえを取りに行った。
ダンボール箱が五、六個ある。開けてみると、上着のようなものばっかしで、ズボン類や下着のようなものはまるでない。それに汚れたものもきれいなものもいっしょくただ。しようがねえなあ。サルートンに帰ればなんかあるだろう。あしたにでも持ってこよう。
なんせ、きようは初めてで、ただただ夢中だったなあ。

④ 破傷風さわぎ

火曜日（一月七日）くもり
〈日刊えっとう〉一月七日号記事
さる二日、Yさんは天六の長柄寮で「不退去罪」で「逮捕」されたが、きのう警察、検察は起訴することもできず釈放した。と思えば又すぐに一日の自彊館に「不法侵入」したという容疑で逮捕した。
Yさんは知っている人もたくさんいると思うが、行政、宿泊所の闘いを中心に担ってきた人である。西成署は、とにかくYさんを闘う仲間から切り離し、そういうことで闘いを押しつぶそうとしている。西成署のねらいは明らかである。
長柄寮の事件といっても、寮に〝入れろ〟〟でてけ〟で少しもめたというだけのこと。テント村の人間が寮をた

ずねていくことがなぜ「犯罪」ということで逮捕されなければならないのか。それに二日の自　館の事件ですでに四人の仲間が逮捕され、五日の裁判所での拘留裁判では四人とも拘留の必要性なしとされ釈放されている「事件」である。

Yさんは、きのう午前十一時五十分釈放され、同じく十一時五十分に逮捕された。

裁判所で拘置すら認められない事件そんな事件で再逮捕。それは何とかYさんをシャバに出さないようにすることだけを目的とするものであろう。

きのう、Iクンはこの事件のためにこれなかったもののようだ。

九時すぎになった。腕を肩からホウタイでつって、むかしお父さんが着ていたようなダブダブオバーの人が医療センターへの呼びかけをはじめた。きょうは私も立上って、

「おじさん医療センターにいかない？名前と年を言うだけで、診てくれるよ」って言ってみた。

知らーん顔してる人。ちょっと私の方を見るけど、何言ってんだろうってなふうをしている人。

「俺、ちょっとカゼひいてんだけどヨオ診てくれっかなあ。」

「わし、ほんとは働きたいんやけど、腰を痛めてしもて・・・この前医者にいったら一ケ月安静が必要やと言われてるんやけど・・・証明書出してくれるやろか」とか言ってくる人もいる。十四、五人も集ったかしら。

ホウタイの彼と私がつきそい役で、きのうと同じようにぞろぞろと歩きだす。

センターに着くと、私はすぐ七階の佐々本さんのところに行ってみた。まあタイヘン。うつぶせになって、ベットから落ちそうになっている。鼻にさし込んであったチューブもはずれている。誰れか呼んでこなくちゃあと、ローカにとびだすと、きのうのメガネのセンセと出くわした。センセの方もちょうどよかったというふうに、「あ、ちょっとこっちに来て下さい。」と言う。

「疑いということですけど、たぶん破傷風です。足のやけどのところから菌が入ったらしい。破傷風の特長は体が硬直していくんだけど、かなり進んでいます。

いまのところ絶体安静で、血清が打ってありますから、動かさないようにして、様子を看ているしかありません。

それから北海道から、彼の奥から夕べ連絡がありました。病状については私の方から話をしておきました。北海道だから、とてもこちらまではこれないらしい。子供がいるということですが、お父さんは死んだことにしてあるから、そのことを含んでおいてくれということでした。

病人が着ていた衣類は、すべて焼却処分にしますから、いいですね。あなたも彼のそばにいたんですから一応気をつけて下さい。まあだいじょぶとは思いますが」

このセンセ、きのうは非番なのに拍りこんで、ついて看ていてくれたということだ。

さあ、それからが大変だ。テント村にはろくに食物もとれず、体力が弱ったり衰弱している人が多い。うつらうつらたき火にあたっていて、やけどをしても気がつかない人がいる。破傷風は、傷口からの伝染病である。

佐々本さんは、テントのどこに寝ていたんだろう。使っていた毛布なんかは焼いてしまわなくちゃあ。場合によっては、テント村全部の消毒が必要だ。

ともかくIクンのところに相談にいこ。

いっしょにきたUくんと、すぐそばのIクンのアパートに走っていった。ああ、いた、いた。

「伝染病なんて、テント村はじまって以来のことや。ひでえことになったなあ。とにかくもう一度センターに行ってみよう」

ということになって、十二階のアパートを又おりる。

しかし、きょうのIクンはとても疲れている様子で、時々あげそうにしている。いろいろ大変なんだろう。

センターから保健所の方に連絡がまわっていて、要請があれば、すぐに消毒をしてくれるということだ。

もう一度、ケガや火傷をしている人は、念のためにセンターで診てもらえるようにIクンが所長に話をつけた。

さっそくテントに帰ってIクンがマイクで呼びかける。

「みんな聞いてほしい。このテントからセンターにいった患者の一人が破傷風であることが判明した。破傷風はみんなも知っているように、おそろしい病気で伝染病だ。傷口から伝染します。ケガをしている人、火傷をしている人、今からもう一度センターに行きますから、是非診てもらうようにして下さい。」

十四、五人の人が申し出てきた。破傷風の威力だろう。

「おい、こっちに動けない奴が一人いるんだ。タンカーで運ぼう。」と誰かが大声を出す。

さっきセンターに行く時は気づかなかったが、テントの中でずっと寝ていたらしい。

「おれもとうか」

「いいよ、おれがもつよ」

タンカーをみんなでかわるがわるかつぎながら、ドヤドヤと再びセンターへ。

例のように看護人が出てくる。

「そんなにごちゃごちゃせんと。一列に並んで！順番にエレベーターにのるんや」

「急病人がいるんやで。もうひとつエレベーターがあるやないか。」

タンカーを先にのせて、ギュウギュウになってエレベーターにのりこむ。

「わいら労働者をバカにしたらあかんで」

みんな口々にいう。看護人はだまっている。

五階につくと、タンカーをかこんで、診察室におしかける。

「急病や、早よ診たってんか」

「なにしてんねん、死ぬかもしれんのやで。」

「患者さん以外はロビーで待っていて下さい。」

と看護婦が言っても騒然としてしまって、なかなかしずまらない。

そこへ例の院長先生がのっそりと現われた。

「大きな声をだすんじゃないよ、他の患者さんがびっくりしはるやないか。わしが診る。」と脈をとって、

「いますぐどうかなるような病人じゃない、わしがちゃんと診て、そうゆうんやから、このお姉さんについてゝもらって、みんな外で待っとれ」

急にみんなおとなしくなってしまった。それできのうと同じように、私がまたつきそうことになった。

その時はじめて気がついたんだけど、片足ない。ひどいむくみがきていて、看護婦さんが足をおさえるとへっこんだまゝだ。かなづちみたいのでスネをたゝいても反応なし。入院が決まる。肝臓がだいぶ弱っているということだ。病室に運ばれていくのを見送ってIクンのところに報告にいく。

Iクンは診察を終えた一人一人に、更生相談所に行くように、話をしている。

センターが入院が必要と診断しても、も

ちろんここに全部収容することは出来ない。それで、更生相談所あてに「入院必要」「要療養」とかの書類を診断書につけて患者にわたす。患者の一人一人は、更生相談所に行ってかけあうわけである。しかし、これを持っていっても、入院できたり、泊るところができたりするかどうかは全く保証のかぎりでない。いまのところ、はねられてもねばり強く何度も何度もたのみこんで交渉するより手がない。というIクンの話。

私もIクンにならって、

「更生相談所を知っていますか。そこに行ったらその書類をわたして下さい。ことわられても、寝るところもないし、せめてドヤ代ぐらいはなんとかしてくれと言ってたのみこんで下さい。ねばるしかいま方法がないんです。」と言う。

全員が診察を終えたのが一時近くだった。テントに帰ると、いきなり

「おい、ねえちゃん、きょうの昼めしは出ねえのか」と呼びとめられた。で炊事係に聞きにいくと、きょうはここでは出さない。　港湾センターで出すという。

そしてマイクで、

「これから港湾センターにデモにいく。みんな参加してほしい。昼めしの弁当はそちらで出します。」と呼びかけはじめた。

（デモにいかない人間にはメシがあたらんちゅうことかしら・・・）

やがて、シュプレヒコールで音どをとりながら隊列をくんで、旗をなびかせ公園を出ていく。腹がすいてるせいだろうか、それとも私の気のせいかなんとなしにかけ声のわりには元気がなさそうだ。

ガランとしてしまった公園に十人ぐらいが残る。その十人で、テントをまくり、床板をはぐ。フトンを干し、米やら食料品やら、荷物を一ケ所にまとめて、消毒が出きるように準備する。

さて、一段落して、ちょっと待つ間にと私は近くのIクンのアパートまで用たしに行って帰ってきたら、もう保健所から車が来ていて、ほとんど消毒は終りに近い。

公園といっても、ほんのちっぽけなんだけど、それにしてもすこぶるあっけない。

なんとなくシインとしてしまった公園で手持ちぶさただ。それでそろそろ私も帰ることにする。三時まえ。

ちょっとばかし疲れた。

◎◎◎◎◎

ここでちょっと、この医療センターのことを紹介しておこう。

五年前に出来上ったとき、あるエライ人が見に来て、

「こりゃあ、釜が崎にしてはずいぶん立派なものが出来たじゃないか。」と言ったというほどの一応のものだ。

たしかに、旧今宮診療所時代のひどい設備に比べれば格段のものらしく、所長の本田良寛先生は、

「医療内容は、大学病院にも劣らないつもりだ」と言っている。（私のわずか一週間の経験でも、かなり丁寧な診療と治療が行なわれているように思えた。）

一九六一年以降、釜が崎に、毎年のように騒動が起きて、行政がその対策の一つとして、職安、アパートなどを含めた愛隣地区労働福祉センターの建設が計画された時、本田良寛さんらの奮闘で、その中に割り込んだ。そして、厚生省、府、市から予算をとりカンパを集め今の医療センターをつくったということである。

昭和四十八年度の説明書によれば、延面積約三九００㎡ベット数一００、内科、外科、皮フ科、ひ尿器科、小児科、精神科、放射線科があって、年間の入院医療約三万五千人、通院医療六万余人、生活保護者及び生計困難者に対する医療を重点的に行い

それらに対しては、無料又は低額な料金で診療を行っている。

経常費は、医療収入と、府、市、区の援助でまかなわれているが、絶対的な赤字でどうしようもない。だから所長のやりくりの苦労と行政に対しての開き直りは大へんなもののようだ。

「わたしは、たぬきだよ」というのは、そのへんの彼のつらさの表現だろう。

この「越冬」に関連しても、センターでは年末年始無休で受入れが行なわれていたが、医者でセンター専従というのは、所長である本田良寛先生ただ一人。他は大学病院などからの出向き、及びパートでうめられている。その人件費は膨大なもので、特に越冬が行なわれている時は、その期間中だけで、センターの一ケ月分の予算を使いはたしてしまったということだ。（たとえば、年末年始の医者、看護婦に対しての支払い額は一人一晩十七時間拘束で五万円、二万五千円だ。これでも相場の半額ぐらいなんだそうだ。）

「大阪府が要求する　釜の医療をすべてまかなうには、ベッド数でも二千以上は必要だ。それには金が必要なのだ。その金を全く出さずにいて口ばかりを出す。昼間から酒を飲む金はあっても、こんなことには金を出さないんだ。全く政治家と役人ほどきたない奴はいないよ。考えるだけでも腹が立ってくる。」とは本田先生のはなし。

「釜ケ崎」という問題が根本的に変っていくには、たしかに現在の経済機構、社会機構を変える政治革命が必要なのだ。

しかし「私は、イデオロギーや、ヒューマニズムでやっているのではない。そんなことで物事が解決つけば、こんな簡単なことはない」（本田良寛著「にっぽん釜ケ崎診療所」より）と本田先生が言うように、いま目の前で人間が行倒れているという日常に当面するとき、医療センターで働く医師、看護婦、看護人、パートその他の人達の仕事は、やはりそうとうなものだと思う。

さらに「越冬」の医療活動は、現実的にこのセンターとの関係で成立しているので、相互的に助けあうというよりはむしろ依存しているわけだ。

たしかに医療センターは、体制側がつくったものであり、その活動は、結局体制的な分野に終るものだろう。だから公式的に言えば、「越冬」とセンターと結びつくことは、むしろ体制補完でしかないときめつけることはできる。

しかし、現実的な視点に立つ時、センターはある意味で、体制と反体制の「接点」あるいはその矛盾の相克を体現した切実な存在である。その点からいえば、テント村がセンターに依存して、その医療活動をすることを、単純に体制補完ということはできない。むしろその結びつきに積極的な意味を見出して、さらに相互的な関係の中でテント村の主体制をどのようにつくり出していくのかということが課題となるだろう。（ちょっとセンターと本田先生にカタを入れすぎたかな）

⑤ 《後記》について

水曜日（一月八日）雨

ゆうべは一晩中雨だった。雨が降ったんじゃ、テント村はたまったもんじゃない。たき火だって消えちゃうし、テントは、一つの方は物置きになってるしとてもみんなが入るというわけにはいかない。

いったいみんなどうしているだろう。明け方ようやくパラパラになった雨が、公

園につく頃、また少しひどくなってきた。
テントが一つふえている。そのテントの下で火を小さくして、十五、六人がよりそってあたっている。広場のたき火がブスブスと白い煙をあげてけむっていて、その囲りにも何人か輪をつくっている。みんな濡れそぼったまゝである。
ふと見ると、ぬかるみに倒れこんだように、そのまゝ寝ている人がいた。上も下も着ているものはぐっしょりだ。ひどい。せめて乾いたものでも着なくては凍えてしまう。
古着をもってきて、「これ・・・」というと、じろりと眼をあけて手をふる。
「着がえたら・・・これと」
ごろりとむこうをむいてしまう。だいぶ弱っているようなかんじだ。
「ね・・・病院にいきましょう」
彼はよろよろと立上った。ズボンが半分脱げそうだ。力なくズボンを引き上げると、しかし彼はそのまゝ手をふりながら公園の出口の方にむかう。
「あのう・・・」
うしろ姿がはっきりと私を拒絶している。とりつくしまもない。何か、ひどく悪いことをしてしまった気がする。

古着を持ったまゝ、うしろ姿を見送っていると、横から、それをほしいと誰かが言ったようだった。なかば無意識でそれを手渡しながらしばらく立ちつくしていた。
（私はもともとケイハクは承知の上で、「それでもやることの方に意味があるノダ」などと考えて越冬の手伝いをやりだしたわけだ。そして行ってみて判ったのだが、実行委の極端な人手不足に対して、少くとも一人分の手足にはなるはずだと思う。
しかし、こういう場面に出会うと・・・ほんとうにどうしたらよいのか・・・この場から消えうせて、とんで帰ってしまいたい。
・・・それにしても、雨の中を出ていってしまったあの人にとって、私は一体何者であったのか。私はここで一体何をしているのだろうか・・・
彼には「越冬」のテントもたき火も、そして炊き出しも、たとえばそこに一夜のねぐらとしての地下道があり、雨露をしのぐガード下があり、そして公園にテントがあった、ということでしかなかったんじゃないか。
彼にとって「越冬」はそんなものだったと思うのだ。もちろん濡れた着物より乾いた着物のほうがよいにきまっている。
しかし彼がほしいのはそんなもんじゃないだろう。むしろ何もしてほしくはなかった ― 少くとも彼が求めていない時、本来何もなしえないのに、何かをなそうとする「おごり」のようなものが私の側にあったのではないか。彼が私の申し出を拒絶して出ていったのは、「越冬」、そして私の身ぶりの中にそのような関係を無意識にでも臭ぎとったから・・・なのだろう。

気がつくと、いつの間にか九時すぎになっていた。が、どうしたことか医療センターへの呼びかけをする人がいない。Iクンもこない。
私はあくまで助手ということで、あまり出過ぎたまねをするつもりはなかったんだけど、九時をだいぶ過ぎても呼びかけのようすがないし、（私はなにしろ九時にはいくものと思っているので）それにあまり遅くなると、診察順がおくれ、待ちあきた人が途中でぬけてしまったりするので、とうとう思いきって、テントの中の実行委らしい人に話しにいった。
「あの、医療センターへの呼びかけをしなくてもいいんですか・・・いつもは九時

にはじめるみたいだけど」
「ええ、あそうか、困ったなあ・・・じゃやります」とマイクを取りにいく。
いつものように呼びかけはじめるとソロソロと十四、五人がテントの前に集ってくる。さてセンターに出かけようと思うのだが彼もいっしょにいってしまうと誰も公園にいなくなってしまうらしい。
「私ひとりでも大丈夫です。大体わかってるから・・・」とついつい引受けてしまった。もうぞろぞろと歩きだしている連中を大急ぎで追いかける。
医療センターでは、テント村から来たといえば、ガリで刷った診察券に名前と年令を書き入れるだけで、簡単に受け付けてくれることに話がついている。（これはIクンの交渉の努力と所長良寛先生の腹芸みたいなものと政治力の結果なのらしい。大したことである。）だからセンターの受付けも、もう私の顔を覚えて、心得たふうにやってくれる。さほどの手間ではない。
私は、待合室でひとりひとり診察の終るのを待つ。そして終った人にきのうIクンがやっていたように更生相談所への道案内をしなければならない。
と、何となくうしろに人の気配がしてふりむくとIクンが立っていた。何か意気込んだようなケンマクで、私に近づいてきてとたんに
「いったい誰がつれてきたんだ！」と大声で言う。
「私・・・がつれてきたけど・・・」
「勝手なまねをするな。問題が起きた時きみは責任がとれるのか」
「・・・・」
「九時すぎにテント村へ来て、マイクで呼びかけようと思ったら、もう出かけた。おれへんと言うやないか」
「・・・・」
「ゆうべは雨が降ったから、みんなあまり寝てないんだ。それに今日は夜も診察を受付けてくれるから、ムリにみんなを早くから起して連れていかなくてもかめへんのや・・・事情もしらん者があまり出過ぎるな！」
あまりガンガンやられるので、私の悪い癖で、どおっと頭に血がのぼってきた。
もうそうなると何がなんだかわからなくなる。一生ケンメイおちつけおちつけとなだめても、もうダメ。ほっぺたがひきつってくる。
「私は、きのうまでと同じことをやってるだけだヨ。Iクンが責任者であるとしても、来れなかったり、遅れたり、すくなくともこの三日間の結果ではあてにならないじゃないの。それがやむをえない事情であるならなおさら、責任者として、誰か代理できるような体制をくむ必要があるんじゃない。Iクンがいなければ、その指示がなければ、センターへ行けないなんていうのは官僚のやり方そのままだよ。
私は私の判断でやれる範囲のことを、臨機応変にやったまでで文句いわれることないわ。
責任をどうとるか、なんて言うけど、今までその責任をとるということがどう行なわれていたのよ。医療センターゆきということに関してはあべこべにききたいぐらいよ。」
「たしかに私は事情にうといし何も知らない。今日は夜も診察があるということも知らなかった。
寝不足の人を起してということでは、私は呼びかけて集った人とだけ来た。そもそも私は、センターへ行きたくないという人を無理やりつれていく気持ちは全然ないヨ」
Iクンは、それについて、

「いきたい人間は、ほっておいても病院へいく。問題は、いきたがらない人にあるんだ。そんな人間をまず病院へ行かせる。行くということからまず出発したいんだ。そしてもし、そいつが病院へいくべきだと客観的に判断すれば僕はなぐってでもそいつを病院につれていく。女がダメだというのは、こういう時とことんまでやれないからだ。」

なぐってでもという時、それは当然なぐりかえされるということがあるわけで、こういった体をはったやり方に対しては、それそのものとして圧倒される。が、

「私には、実際の現実をみていると、病院へいってもしようがないという気持ちをおさえがたい。診察をうけ、入院の必要ありという診断が下されても、その後の予測できることがらについては、どうしようもない。運よく入院できて、多少命が長びいても、それだけだ。行きたいという人には当然機会があるべきだが、行きたくないという人に、私はひっぱってまでいく勇気はない。」

二人ともつい声が大きくなっていたのだろう。まわりの人がこちらを注目している。

「ここで、こんな話をするのはやめよう」とIクンは言ったが、私は、たぶんとても興奮していてまわりを気にするゆとりがなかった。それに他にも言いたいことが山ほどあるような気がした。

Iクンを追っかけるように、

「Iクンは運動ずれしてるんだヨ。なるほど私はカマのことは何も知らないのかもしれん。いわばしろうとだ。だけどIクンだってはじめはそうだったんじゃないか。いや私はいつだってしろうとでありたいと思っているけど、むしろ、しろうとが出来る運動というものを、今あらためて考えなければいけないんじゃないか。」

Iクンは、今までカマの救援をほとんど一人で頑張っていて、その実積は、きのう、少しの間いっしょにいただけで、充分はかり知れるほどだ。たとえばセンターの所長とのやりとりを見ていても、それは、はっきりうかがえたし、実行委の人の中に、何か事がおこると彼の判断と処置を頼りにする態度でも、Iクンの実力とそのつみ重ねがわかる。

イスにこしかけてIクンは私にこう言った。

「去年は、〈青医連〉なんかが、労働者の立場からの医療をということで支援にきていたが、テント村でベタベタ薬をぬったり、診断して薬を与えたりした。これじゃあ、ただでさえ病院にいくのをいやがっている連中は、ますます病院にいかなくなる。まず病院に行くようにすることからはじめたいんだ。それから、支援の連中ときたら、ここにこそ革命があるとばかりワッとおしかけてきて、サッといなくなる。かきまわされたあとの者はいい迷惑なんだよ。」

カマに三年いると結核になるといわれているほど、結核患者が多い。開放性の人もたくさんいる。自分では気づかないでいる場合が多い。だからまず病院にいかせたいというIクンの考え方は、その点からは当然なことである。

だが、Iクンと話をしながら、私には朝方雨の中を手をふりながら出ていった、あの人の後姿が、だんだん大きく、どうしようもなく浮かんでくる。

たぶんIクンと私とは、それぞれ別々の思いをいだいて話をしていたのだろう。

それでもとにかくみんなを更生相談所に送りだしてIクンとセンターの前で別れて帰路についたが、なんともすっきりしない思いだ。Iクンも同じだろう。

⑥ 良寛先生

木曜日（一月九日）

きのうＩクンとの話で、呼びかけは九時二十分頃からでいいということで、今朝は、少しゆっくりと家を出た。

こんどの「越冬」のことでは、自分の中にはじめからかなり「かまえ」がある。なんとかしなくちゃあ・・・

Ｉクンは、きょうは差し入れに行くのでいない。きのうみたいにケンカごしじゃなくて話できなくちゃいけない・・・

公園についたら、もう九時前だった。

しばらくすると、もう誰かが、

「いまから医療センターにいきます。いく人はテントの前に集って下さーい。」

センター行きは、毎日の日課になっているので、誰かそれをこころえた人が世話役を買って出ているのだ。

私もたき火の輪をひとつひとつまわって呼びかけた。

「ヨオ、ねえちゃんベッピンやなあ」

「ねえちゃんがつれてってくれるんやったら、わいもいくわ」

顔も着ているものも、ススで真黒で、ほとんど意志表示をみせない。うつろな目でまぶしそうに顎をむけているだけだ。

たまに、ほんのたまに、いまみたいに声をかけてくる人がいる。しかし、その違いは、私にはわからない。

ただ、みな驚くほど年のわりには、老けてみえる。それはもう、受付けをしていて年をきいてびっくりすることがたびたびだった。

それから、こんなこというとおかしいかもしれないけど、どんな人も自分の名前を漢字で言った・・・・人間にとって、自分の名前というのは最後までというか最後の存在のあかしとしてあるものなんだなあ・・・・・

きょうはＵくんといっしょにセンターにいく。Ｕくんは腕をケガしていて、肩からホウタイでつっていた。

彼は、自分の治療を終えると、テントの方に人が足りないということで帰っていった。

七階に入院している二人を見舞う。Ｓさんは、同じ状態。Ｏさんは、頭を丸坊主にされちゃってさっぱりしたもんだ。タバコ一はこ差し入れ。

再び、五階の待合室の長イスに坐って、みんなの診察が終るのを待っている。

「ここは、酔っぱらいは一切受け付けへんのしってるやろ。診てもらいたかったら酒をのまずにくるんや。」

一人の男が数人の看護人にとりおさえられて、エレベーターのところまでひきずられていく。

「おまえら、俺をバカにするんやな。俺はちゃんと保険も持ってるんやど。ただで診てくれゆうてるんと違うんやそ！」

看護人の腕をふりはらって、私の前にくると、

「ほら、ねえちゃん見てくれ」

ポケットから、しわくちゃになった保険証を取り出して私に見せる。

どうしてよいかわからず、あせってしまう。

「どないしたんや」

良寛先生がやってきた。あいかわらず大きなずう体で、彼に近ずくと、いきなり顔をくっつけて、クンクンかぎだした。

「うわあー。いいにおいさせとるやないか。においをかいだだけでわしまで酔っぱ

らってしまいそうや。」
彼は急におとなしくなってしまって、
「どうもすいません。ちょっと友だちといっぱいやったもんですから」
「そやろ、おまえが大声だすから、みんなびっくりしてはるやないか。
診てもらうんなら、いっぺん酒の酔いをさましてからこいや」
「やーっ」
と彼をだきあげると、そのままエレベーターの前に。
「へへエ、どうもすんませんでした。」
あまりにあっさりというか、簡単に終ってしまって、私はキョトンとしてしまう。
まあ、いろいろあると思うけど、こういうのはやっぱり良寛先生の人柄だなあ。
真似をしようと思っても出来るわざじゃない。私にはとっても出来ないなあ。
しかしあのだきつくという表現は、きっと、とってもだいじなんだと考えさせられた。

⑦ 敵と味方

金曜日（一月十日）
日ごろ、寝ぼすけの私がどんなに遅く寝ても、テントに行く時間になると、目がさめるようになったのは、フシギなもんだ。このところ睡眠時間は毎日、四、五時間なのに・・・
テント村につくと、いつものようにたき火の輪に入りこむ。五日目ぐらいになって私も少しなれてきた。
「ねえちゃん、大学生？」
「わたし、学生とちがうよ」
「じゃ、なにしてんねん」
「うどん屋につとめてる。きつね一丁、かけ一丁。」毎日、店でやってるように大声で実演する。
「へー、うどん屋のねえちゃんか。そうは見えへんなあ。」
学生じゃなくて、なんかがっかりしたみたいだ。

「ちょっと、ねえちゃん、あのおっさん、ちょっとおかしいんとちゃうか。倒れたまま起きへんで」
行ってみると、たき火のすぐそばで、うつぶせにたおれている。横顔に見おぼえがある。
四、五人が寄ってきた。口々になんか言っている。一人が脈をとる。
「あっ、アカン、だいぶ弱いわ。」なんていう。
私は、とにかく医療センターに運ぼうと思った。テントに向って
「ちょっとタンカを持って来て下さい」
と言うと、初日からおなじみの、例のAさんが強い調子で、
「いや、こんな時は救急車を呼んだ方がいい。」
「誰か電話してこい。」という。
カマのアンコだと見ると、救急車でいっても受付けてくれなくて、たらいまわしにされたあげく、ほうりだされるなんてことを聞いたことがあるので、私は、
「医療センターがすぐそこだから、みんなで運んだら」と主張した。
人だかりの中から
「いや動かすと危い」という声もある。

私はもう頭がこんぐらがってしまう。がことは急を要する。

「じゃ、電話して下さい。」というと、誰かが走り出した。それでも私は救急車でいくのに不安がある。

「救急車がきたら、あなたいっしょにつきそって行って下さいね」と支援の人にたのんで、私はIクンのアパートに走っていった。相談したかったのだ。しかしやはり留守だった。走って公園にもどると、ちょうど救急車がきたところだった。

俺もいくと申し出た仲間と支援の人二人が乗りこんで、車はすぐ走り去った。

うまくいくようにと思う以外、もうしようがない。しかし、救急車の乗務員というのはあんなもんなんだろうか。場ズレしているんだろうけど、なんか警官みたいなムードだな。

気がつくと、時間は九時をだいぶすぎている。Iクンは今日もこれないらしい。救援の方が忙しいのだろう。他に支援の人もみあたらない。こうなったら私が呼びかけをやる以外にないだろう。助手の立場以上のことはやらないつもりなのだが、つい出しゃばってしまう。

きょうは一番多く、二十二人がセンターへ行く。

Oさんは、いつも酔っぱらっている。フワフワ泳ぐように歩きまわって、

「自業自得なんだ。自業自得なんだ。自分が好き勝手なことをやってきて、こうなったんだからしようがないよ」とか

「人間根性が大事だ」とか、いつもぶつぶつ、つぶやいている。そして私の顔をみると、

「ヨオ、ねえちゃん」とやたらだきついてくる。

頭の毛は、もう真白で私は六十いくつかと思っていたら、年を聞くとまだ五十三だという。このおじさんも結核なのだ。

毎日、更生相談所へいくんだが、酒のにおいをさせていくので、

「また、こんど来なさい。」と追い返されるらしい。（酒の臭いがしない人でも断わられることが多いらしいが）

「おじさん、断わられても何度もいくんだよ」というと

「そうか、そうか」と出かけるんだけどいつもダメらしい。それで相変らず入院できないで、カマの中をフワフワ歩きまわっている。

今朝発行の「日刊えっとう」によると、医療センターは、今日までと書いてある。とすれば、私の仕事は今日で終りというわけだが、良寛先生は、テント村が続く限りいつものように来ていいという。

Iクンに出会って、そこらへんを教えてもらいたいと思うのだが、夜は私バイトだし、なかなか会えない。その日の報告は、紙に書いてIクンのアパートに、おいていくんだが、一方便りだし・・・だから「えっとう」全体のようすにしても毎日の「日刊えっとう」を通じて、ちょっぴり判る程度なのだ。

U君は、私にこういった。

「テント村を続けることは、もう意味がない。なぜならそこには闘いがないからだ。テントには敵がいないのだ。敵のいるところに出かけていかなくては闘いにならないのだ。」

私はその時は黙って聞いていたが、その意見には反対だ。

（テント村を閉鎖する、しないという問題では、こちら側の力不足とか、権力側のうむをいわせぬとりつぶしで、やめるということは出てくると思う。それなら仕方がない。そうでなく、テント村の内容や質をぬきにして、闘いがないからやめるという言

い方はおかしい、と思う。

テントには敵がいないというのは、どういうことか。味方ばかりということか。たとえば、カマは労働者の街だという。だがそれは、体制側が占領した土地に、労働者が多数集まっているだけにすぎない。つまり、テント村はそのような敵の占領地の内部につくりだした「難民の収容所」であり、活動の拠点であり陣地である。そして、そこへ集ってくる難民、アブレた労働者、活動家。それは味方に転化しうるかもしれないというだけで、味方でもないし、敵でもない。あるいは時に味方でもあるが敵にもなるということで、労働者であるが故に味方であるという意味では、もともと存在していないのじゃないか。

・・・しかし問題はまだある。その発想方法の根本にある「大義名分としての労働者利用主義」だ。だから「活動家」たちにとって、しばしばテント村が闘争の手段になってしまって、闘いがない時、その維持は無意味ということになってしまうのではないか)

しかし、そういいながらもUくんは、テント村延長のため交渉に行くと言っていた。そして、多分公園は借りられるのだが、延長するかどうかの決定は、幹部がするので、自分にはわからんということだった。

とにかく明日は、テントがあることは確実らしい。それに、ここにこうして集っている人たちを、どうして急に追い払えようか。

いつものように、センターへ行って、帰路についたのは二時。

(次号につづく)

前号に対して、十九人の方から手紙をいただきました。とてもうれしかった。ありがとう。しかし、なかにはきびしいのもあったなあ。

▒ こんどの文章みて思ったのだけれど、さっちゃん(これ私の本名)は、いつも当事者になりきれないところがありますね。主体者ではなく、いつも素人でかゝわろうとするけど、常に一定の時期がくると終って離れてゆこうとする。・・・僕はわりとかってに、女の人はどこかにドテッと腰をおろし、根をはるものだという思いこみがあるので、そうした思いで見ていると、さっちゃんは根をもたないで漂流をつづけているように思う。

うーん。

▒ 三回読みました。「この一文を書くことで、お礼にかえたいというふうに思った」とあるが、本気でそう思っているのか疑問である。・・・これは明らかにフィクションである。あなたがいくら経験的な生活そのものをかこうとしても、それを文字にした時、同時に真実は消えてしまう。書くということは、それ自体ただの意識にすぎん。

・・・・・・

▒ まず軽薄という言葉から想像をめぐらしてみました。この言葉はあまり良いイメージを与えないですね。結論からいえば私達が自分の生活に直接関係してこない問題と取りくむとき、それは軽薄でしかありえないのではないか。私達の態度は正にその言葉通り軽薄そのものではないだろうか。という認識にいたったのです。・・・が受け入れ側からすれば、その軽薄さが態度の不まじめさと受け取られるのではなかろうか?・・・のために助っ人にいくと考えたくない。つまり使う側と使われる側という形でとらえたくない。あくまで主体的に自分のために助っ人となる。自分で、創造的に何かやる、かゝわっていくということであれば、少くとも自分の側の問題としての

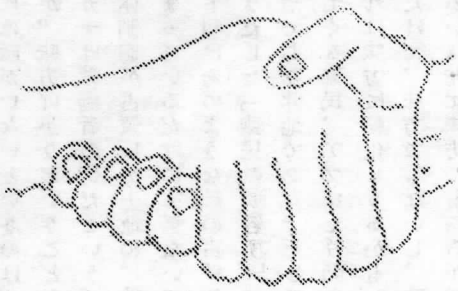
うしろめたさ。はずかしさはやわらぐのではないだろうか

これが何のためになって、人々がどんな感動があるのかなと何かわからない気持がします。　これは私のお母ちゃんから

それから釜で、「労務者渡世」という雑誌をつくっているTさんから「下」が出たら戦争しようねと言ってきている。

「あさひまちWRI」では、大いに誌上での反論、批判を期待しています。

四月十五日　（風）



日録抄

三月十三日　百人委のため上京。「すわりこみ」合評。

三月十五日　ひさしぶりに麻ちゃんに会いにいく。もう日本語ペラペラ。いい子だ。

三月十七日　FRI号訪問。腕をふるっていものに込み料理をつくる。大いによろこばれる。

三月十八日　郡山に杉藤さんを見舞う。

三月廿四日　佐々本さんを見舞。もうすっかり元気そうだ。

三月廿五日　上京。FRI号に乗ってきたロングラップの村長、アンジャインさんの送別会。

三月廿七日　市川WRIの古沢さんの寺、浄鏡寺でFRI号のデイビイッド、ロイ、アニーと大いに語り（？）合って、意気投合する。

三月廿八日　歩々ちゃんとヒロにとんかつをごちそうしてもらう。たまに会うというのもいいもんだ。

三月廿九日　塩山の小島さんのところに一泊お世話になる。家のまわりはずっと梅畑。それはもうすばらしく。桃源郷ならぬまさに梅源郷だ。

三月三十日　甲府。宮下太吉墓前祭。よしむら君と合流。その夜かじか沢で一泊。もう少しで橋の下。

三月卅一日　甲斐岩間にちょっと降りてみる。スケッチブックを開いていねむり。次にまた汽車に乗って、こんどは身延山。すっごい石段で息たえだえ。ケーブルに乗ったら、富士山がとってもきれいだった。またまたコトコト汽車にゆられて夕方だ。芝川というとこで降りてみた。そしたら温泉があってちょっとひとフロ。ついでに晩めし。うまかったあ。最終に乗って静岡へ。夜中二時静岡を発って帰路大阪へ。

四月三日　FRIニュース印刷、発送。

四月四日　釜ケ崎・生活と闘争　映画会（フィルム一本五千円で借りれるそうです）

四月五日　広島から岩谷さん、サルートンにたちよる。

四月七日　しのだくん、若松さん遊びにくる。夜中一時すぎまで話していて二人とも泊っていった。またどうぞ。

四月十三日　天王寺公園で、ひさびさぶりに反戦露店市。あいにくの雨もよいでお客さんが少い。私は、かまぼこ板でつくった箱を二つ売った。三百五十円ナリ。

（風）

あさひまち-WRI
水田ふう個人通信
No.4. 1975年6月
大阪市あべの区旭町
2-12-2 泉原文化

WRIというのは、非暴力主義をかゝげる反戦国際組織（戦争抵抗者インターナショナル）の略称。あさひまちは、私がいま住んでいる釜ガ崎のいわば山の手にあたるところの町名です。個人通信には、ちょっとおかしいかんじだけど、私としてはこれにいろんな意味をこめたいというつもりなのです。

この通信がひとつのキッカケになって仲間ができたらうれしいと思います。

不定期です。動きながら出し続けたいと考えています。

だんだんと熱くなってきました。せまいアパートにいると熱さで頭がおかしくなってきます。そんな時は気ばらしにでもわがあさひまちWRIに遊びにきませんか。——合言葉・切手にノリを！

釜ガ崎越冬テント村の八日間・下

⑧ テント村の雑感

土曜日（一月十一日）

きょうは、ちょっと寝ぼうしてしまった。公園についたのは九時少し前。

いつものように、たき火に近づいていくと、みんなりよう手の中へ顔をつっこんでしきりにモグモグ口を動かしている。ビスケットの配給があったらしい。おいしいのか、おいしくないのか、水も飲まずに・・よこで見ていると、こっちののどがつまりそう。

テントの前に五、六人がならんでいて、ひとつかみづつビスケットを受取っている。列がとぎれそうになると、まだの者がまたうしろにパラパラならぶ。のろのろ、いかにも面倒くさそうに歩いていく。先を争うとか、量の多い少ないに気を配るとか、そんな風なけしきはみえない。

遠くから見ていると、すべて静かで、のどかな感じなのだがとてつもない無気力におそわれているのである。

九時をまわったので、私はIクンを待たずにセンター行きを呼びかけることにした。

「センターに行きまーす。診てもらいたい人、ここに集まって下さーい。」

集まったのは十四人。そのうち三分の一ぐらいは、いつもと同じメンバーだ。

Oさん　毎日相談所に通っているんだが、そのたびに断わられてテントにもどってくる。五十二才。結核。はた目にもかなり弱っているようすで歩くのもしんどそうだ。センターからは当然入院必要と言われている。

Mさん　センターは、きょうで三日目。自分の順番がくるのを待ちきれないのか、途中でいつもいなくなってしまう。四十六才。いつも酒の臭いがする。

Sさん――奄美大島から来たという。まだ二十七才の若者。「俺なんか死んだ方がましなんや」と弱々しそうに言う。

Aさん――彼もまだ若くて二十五才。ひよろひよろっとして背が高い。突然何者かにおそわれて、メッタ打ちにされたということだ。顔にひびが入っていて、立ったり坐ったりするのさえやっとという状態。

それと、きょうは何ともすごい人がひとりいた。ボロを着ているというだけではない。その人がいるだけで、まわりの人全部が異様な臭いにつつまれてしまう。とってもやさしそうな目の人で、なにか言うと、「ハイッ」「ハイッ」と、ピョコンと頭を下げる。見た目よりずっと若くて四十二才。Kさんという名だった。

センターで、手続きを終って、みんないつものようにローカの長イスに坐って順番を待つ。

例のKさんは、イスの上で気持ちよさそうに居眠りをはじめた。・・・と看護婦さんがやってきた。Kさんをつかまえ、手ぎわよく身ぐるみをはいでいく。あっという間もない。みんなが見ている中で、すっぱだかにされて、彼はオチンチンを手でかくしている。でもそんなに恥ずかしそうでもない。

頭から白い粉をふりかけられる。カミの毛が真白になる。次に新しい服が持ってこられて、上から下まで衣裳がえ。とたんにKさんは、なんかまるで違う人みたい。看護婦さんは、まだシラミを追っかけて、イスの下やら空中やらに向けて白い粉をシュシュコ吹きつけている。

（しかし、彼の臭いは強烈だったなあ。私は家に帰ってからでも、なんとなく臭いがしみついているようなかんじがして、つい何度も自分の指をかいでみたりした。）

きょうは、比較的早くみんな診察が終った。それでも一時近く。

テントに帰ると、もう昼の給食がすんだところだった。Uくんが、「少し残っているけど、食べていかないか」と声をかけてくれた。私はお腹がペコペコだった。にもかゝわらず、私は思わず

「いいよ」って答えていた。

「食べてへんのやろ、遠慮せんかてええんやで、残ってるんやから。」

彼は、いかにもおいしそうに雑炊をかきこんでいる。

「うん。だけど私なら帰ったら食べれるし・・・まだ他に食べたい人いるよ。」

だが、私が「いいよ」と断ったのは、ほんとうのところそんなかっこよい理由からではない。何よりも第一に食べる気が起こらなかった。雑炊がいかにもまずそうだったというより・・・みんなが使っているその同じハシ、同じ食器を口にあてて食べるのが何となく気持ち悪くイヤだったのだ。・・・これと同じようなことが、まえにもあった。

小学生の時だ。私の家の近所に「こえくみ屋」の一家があった。そこには私よりずっと小っちゃい男の子と女の子がいた。いつもよごれた身なりで、顔や手も真黒だった。あんまりかまってもらえなかったのだろう。

私はその子たちを見るたびに「かわいそうに」と思った。いっしょに遊んだりはしなかったが、いじめる子がいると、その子とケンカした。

ある日、私が銭湯にいくと、その女の子が母親と来ていた。

私が洗面器にお湯をくんでいると、女の子がちょこちょこそばに寄ってきた。と、いきなり私の洗面器の中に手をつっこんだ。

「あっ」

と小さく叫んで、反射的に私はお湯をかい

だしていた。

こえくみ屋の子だから、うんこでもくっついてると思った・・・というわけでもないのに。

そして何かの拍子にそれを思い出すたびに体中がカアーッと熱くなってくる。そして一体私というのはなんなんだろうと、ゆううつになってくる。だが、それだけで、そのことは一向に私の中で解決しないのだ。

⊗　⊗　⊗

テント村は、まだ続きそうだが、あしたは日曜日だからセンターはお休み。ともかく丸一日テント村のことを考えなくてよいなど思いながら、その夜、アルバイト先のうどん屋から帰ってきた。と留守の部屋にIクンからの置手紙があった。

「いわば、現場放棄というか、医療センターの仕事に顔を出していないこと申し訳なく思っております。

医療センターに関しては、僕としては十日で打ち切るのが最も適切だと考えています。もちろん医療センター（良寛）はいくらでもつれて来いと言うことはわかっています。そして、それは良寛の悪い所であり何人かの献身的な職員への安易な良寛のよりかゝりでもあるわけです。

そして、それ以上に今日（十一日）の日刊えっとうに書いてあること（医療のこと）を問題にしたいのです。

やりつづけること、それは一見親切でありますが、実はこれほど不親切なこともないわけです。そして、僕はこれ以上つづけたくありません。それをもっと早く貴女に伝えるべきであったと反省しております。

きのう七人、きょう二人逮捕されました。体調もおもわしくなく、事務所にめいわくをかけていることもあって、これ以上医療センターへのあっせんは、事実上不可能でもあります。ただし酒はのみます。

当分は救援に専心します。実に消耗した越冬でした。」（全文そのまま）

このIクンの文章に出てくる「日刊えっとう」の記事はこうである。

『きのうまで、医療センターへ行くのは皆でまとまって行っていた。しかし今日からは自分で行こう。テント村がある間は、「テント村から来た」というだけで、かんたんな手続きでお金もいらずみてもらえます。

自分のことは自分でやるのは当然のことだし、とくに病気のことだから自分でなおそうという気持ちがなければだめだ。病院なんか誰も行きたいところではない。しかし病気をなおすにはまず病院（まず医療センター）に行くことからはじめなければならないことを、きもに命じようではないか。それも誰にもたよらず、自分の足で！

医療センターへは自分で行こう。』

（一月十一日号　裏面下段）

いつも中学生あつかいしたりして私をからかうIクンにしては、この文章はずいぶんとていねいで他人行儀だ。かなり疲れているらしい。彼がこのように言いたい気持もわかる気がする。

しかし、Iクンのことば尻をとらえていうわけではないが、この手紙の内容は、Iクンが最初の夜私にしゃべったことと矛盾している。もちろんこの文章そのものは、立て前としては正しく、まちがっていない。

カマの労働者は、もし病気なら自分の判断と意志で誰のすすめも、力もかりずにセンターへ行き、診察することを要求すべきかもしれない。テント村から連れていかなければ河も出来ないというような、他人への依存やあまえはよくないと言うべきなのかもしれない。だからたしかに、「一見親切で、実はこれほど不親切なことはない」という論理は成立する。そのことからすれ

ば私のこの一週間の行為は、「これほど不親切なことはない」ものであったと言うべきだろう。しかし、その不親切はもともとテント村の最初の一日目からそうなのであって、私の負うべき不親切ではない。あるいは最初親切で、十日目になって突然「不親切」になったのでもないだろう。

つまり、「越冬」が終って ― テントから来たというだけで診てもらえるようなシステムがなくなった後で ― 一人で病院に診てくれと行くことが出来るような自発的なやり方を、「越冬」がその期間中につくり上げたかどうか、少くともテント村をやめる時点で、そのような自主的方向が生れ、今後その見込みが出てきたか。この問題をぬきにして、突然いま急に、「やり続けること、これほど不親切なことはない」といい切ることはできないことだ。

私の場合、もちろんやり続けるなどということはとうてい出来ない。だから、やるということは初めから越冬期間中だけという期限つきのものだった。その意味で、はじめから軽薄で、「不親切」なことでしかなかった私の「越冬」の手伝いを、もし「続けることの不親切さ」という論理で打ち切ってしまうのなら、さらに無責任で不親切を加重することだと言わざるを得ないだろう。

「越冬」は、そのように自己を正当化してやめられるものではなく、もっとカッコ悪くやめるものになる以外にはないと私は思う。もっとざっくばらんに

㋑ はじめに予定した期間が終ったから。

㋺ 実行委（私）の能力と限界が限度に達し、継続できないから。

㋩ 権力側の妨害、弾圧と、その力関係で維持できないから。・・・・。　つまりーテント村の主要な問題は、親切、不親切というところにあるのではない。むしろ、もっと卒直に、いまのところこれしか手がないんだ、それでもやらなきゃということでやり出した出発点の再肯定、だからそのやり方の方法にこそあるのではないか。

多分私のこのIクンに対する意見は、事情を知らないシロウトの理屈で、日々の釜の闘いの中で消耗せざるを得ないIクンにむかって、私自身いかにもおこがましい限りだという気はするのだが・・・・しかししかしやはりそう思うのだ。

▒　▒　▒

置手紙をよんだだけではどうも気持ちがすっきりしないので、日曜の夜Iクンに電話した。

「置手紙を読んだよ。だけど私、土曜日に内科しか診てもらわなかった人と、酔っぱらって追い返されてしまった人に、月曜日に来て下さいと言ってある。それでとにかく月曜日も私はいってみるつもりだけど・・・」

「そんなのきっと来ないよ。それに、テント村は、もうありませんワ。取っぱらわれてしまったんですよ。要するに負けたんですよ・・・」

テント村が取っぱらわれてしまったという。それはもう否応ない結論だ。　それをきいて、私は実のところ内心やれやれと解放された気持ちになった。そりゃあ意地（といっても他人に対するというよりもむしろ自分自身に対してのものだ）だから、テント村が続く限りはゆくつもりでいた。しかし連日、朝から午後の二時近くまでセンター。それから帰って、あれこれ動いていると、もう五時半。六時から十時までがうどん屋でのアルバイト。やっと落着いて自分のことをするのが夜中十二時ごろから、さてーと本を読んだりして寝るのは二時か三時。その間フロ、洗濯、食事とあるのだから、少々ながらくたびれていた。

しかし、一方では急にいろんな感情が渦巻いてきた、だが声にならなかった。
「そうなの・・・そうなの・・・・」
私は絶句したまゝ、いつのまにか受話器をおいた。

⑨ わたしの助っ人論

月曜日（一月十三日）
九時ごろ公園にいった。寒い。
たき火がまだ二つほどあって、そのまわりに二、三十人がかたまっていた。
テントはきれいにとっぱらわれていたが。
「おはよう」
「テントなくなっちゃったんだね」
「やあ、うどん屋のねえちゃんか」と、すき間をあけてくれる人がいた。私は見おぼえがなかったんだけど。
おじいさんが、こわれたイスから立上って、席をゆずってくれる。

「オレ、今朝はよから行ってたんやけどやっぱしあぶれや・・・」
「車の免許あるんや・・・・」わざわざ胸ポケットから免許証を出して私に見せてくれる。
「だけどなあ、仕事に行こうと思ってもこんな真黒じゃ誰も使ってくれねえよなあ・・・」
せいぜい三十すぎぐらいで、まだ力もありそうだけど、青カンしてるから、顔も服もススけている。
火が弱まっている。しかし、たき木はもうない。誰かが車のこわれたソファーをたき火に投げ入れた。
「あっ、あかん、あかん。こいつは煙だけや。」
若い男が急いで外にけり出したが、燃えつきが早く、煙がすごいいきおいで吹き出した。
「しゃあない奴ちゃなあ、こんなもんくべやがって・・・」
ほうりこんだのは、気の弱そうな人で、小さくなっている。煙はなかなかおさまる気配がない。
「この煙吸うたら、えらい毒やで。」
みんなが遠まきにして、煙の流れをよける。
あたりを見まわしたが、おとといい私が月曜に来てくださいと言った二人は見あたらなかった。
むこうのたき火では、石油カンにラーメンをほうりこんで、木切でかきまわしながら煮立つのを待っている。
ふと気づくと、さっきから少しはずれたところに、フトンもなしに転がっている人がいる。
「あいつ、朝からずっと寝たまゝや、びりとも動かんようやで。」
「でも、わしらでどうしようもないしな・・・・」
「・・・・・・・」私もどうしようもない。

テントがなくなって、もとからあるバラックの家がめだつ。公園の敷地にはいりこんでいる。いつの間にか既成事実にして占拠してるもののようだ。
しばらくすると、トラックが一台公園の中へはいってきた。市の清掃班らしい。人夫が五、六人車からおりる。まるで、こちらの方を気付かぬように掃除をはじめた。はしの方からゴミをあつめ、掃いてくる。

そばへやってきて、たき火も片付けてしまうのかと思ったら、そこのまわりはさけるようにとばして、次へ移る。まんなかで寝転がってる人のまわりも残す。と、

「ひよっとして死んでるのでは・・・」

と思った人が、急にむくむくっと起きだした。かたわらの紙袋をとって、しきりに何か捜している。

「これかいな。」

掃除人夫が、集めたごみの中の空カンやボロを、箒をひっくりかえしてひろげてみせる。ビン、それに紙につゝんだ割ばし、空カン。それをゆっくり拾いあつめると紙袋へ入れる。

そして、黙ったまま歩いて公園を出ていった。

あの後姿をみせて雨の中を立去っていった人もそうだったが、どうしてこの人たちの最終的なすがたは、きまってこんなに無言なのだろう。そして、何も語らないということは、ちよっとやそっとでは語りつくせないようなおもいの無量さを何と語るものなのだろう。

・・・・・・・・・・

私は少し落着いてきたタキ火の黒い煙をぼんやり見つめながら、なんとなく複雑な気持ちで、八日間の「越冬」を思い返していた。

いまのとても複雑な気持ちからすると、〃私も何かしなくちゃあ〃といった、はじめ「日刊えっとう」を読んだ時のものすごい、いきごみは、いったいどこから出てきたのか不思議なくらいだ。

しかし、そのいきごみがあまり歓迎されなかったにもかゝわらず、私をおしかけ助っ人にまでさせたわけなのだが・・・。

ところで、この文章の初めから、私は助っ人、助っ人とさかんに自称してきたが、一段落したいま、私のいう助っ人とは何かをはっきりさせておく必要があるだろう。

たとへば、私がいまゝでやってきたことというのは、六十七年からのベトナム反戦にはじまって、一年七ケ月の子育ての共同生活もふくめて、口では（いや、あんがい心底から思いつゝ、あるいは思わねばならないことゝして）自分自身の問題としてかかわる、やるのだと言いながら、実は、それは、ただじっとみているわけにはいかないといったことでの他人のことの助っ人行為だったという気がする。しかし、それをはっきりと私は助っ人であると自覚してのことではなかったから、むしろ常にどこかうしろめたさを感じつづけてきたのだった。

ところで、向井孝さんが出している最近のサルートンに書かれていた「助っ人論」は、そのような今までの「助っ人」のあり方と意味をひっくりかえすものとして提示されていた。私にとって、いまゝで否定的にしかとらえていなかった助っ人が、それを自覚的、積極的にとらえかえすことで、全く新しい運動の視座を展くものになってきた。

もともと当事者ではないのに、当事者にならねばならないというかんじ方や、そこから出てくるうしろめたさは、つきつめればつきつめるほど、自分で自分を疎外していくことにしかならない。またそれは、運動の当事者（?）からも、「しよせん、あいつは違うんだ。」というかたちで切られていくことになるだろう。

当事者になれないということを、開きなおるのではなく、もっとあたりまえのこととして考えたらいいんじゃないか。だってやっぱし当事者ではないんだもの・・・と今までの私のやってきたひとつひとつを思いうかべて、そう思った。

世の中に重大な問題というのは、いっぱいある。しかしそのひとつひとつすべてに意識的な当事者であり得ることは、とてもできない。たまたま具体的にかゝわったその部分だけの限定的な当事者ということでしかないのだ。と考える時、実際には世間一般に存在する運動の中のほとんどの人たちのほとんどの行為が助っ人的であるといえるんじゃないか。

重要なのは、それが自分にとっての行為であると共に、必ず他の人と関係の行為であるということだ。だから問題は、「どれだけ自分自身が問題を問題としているか」よりも、自分の行為を自覚し、「総体のなかでの自分の存在的役割がどれだけ果たせるか」ということなのではないか。

つまり、私としては、「この問題と私との主体的かゝわりはいかに？」などと深刻になることで、かえって行動そのものを後ずさりさせるような在り方をやめて、ざっくばらんにいえば、あっけらかんと、その時、その時の私の好奇心と、もののはずみが一致すれば、どこにでも風船玉のように飛んでいって、ほいきた、とばかりに動く、働く。自分のやれることをやる――というわけだ。

もちろん助っ人である以上、そのかゝわり方は限定的、条件的である。（全的なかかわり方というものは、自分の思い込み以外にはあまりないのではないか。だからこの場合の限定とか条件とは、あいまいではなくきわめて厳格に、という意味である）その自他の限定と条件を明確に意識することによって、自分の役割を相手との関係のなかで積極的にみつけだし、工夫しなければならないことが出てくる。　それが助っ人なんだ。

このようにして、私のテント村への出入りがはじまったのだが・・・・。

ところで私は、私が今まで関係していた横田基地解体や、百人委などの小さい経験だけど、ともかくどんな運動でも、いつも新しい仲間を求めている、仲間をほしがっているということがある。そして何かをやろうとする時、いつも人手不足だ。つまり仲間が多くて困るということは、およそ考えられない。だから私としては、越冬テント村の手伝いを申しでて歓迎されないということなど思いもよらないことだったのだ。

この、最初から私の思わくと違ってしまったことの問題は、はじめそれほどのことじゃないと思ったが、いまになっても案外に強く私の心にしこりを残している。そして私の「えっとう」助っ人行為は一体何だったのかということに、いま答えを出そうとするとき、しばしば私に混乱をおこさせるのだ。

まず、私は助っ人のはじめから、助っ人ジンギに反して、かなり感情的になってしまった気がする。「気楽な風船玉のようにふんわり」なんてもんじゃとてもなくて、ほっぺたをこわばらせ、肩ひじはって、テント村に通ったのだった。

そのことは、「相手との関係のなかで、限定的な自分の役割をみつけだす」といいながら、実際には自分一人だけのふんばりみたいなものでつっぱしり、浮き上がったものにしてしまったんじゃないか。

そして、「相手との関係」という時、私にとっての相手とは一体誰だったのだろう。

私が実際に関係を持った、あるいは持ちうる人というのは、テント村の設営者側である、いわゆる活動者である。この人たちは釜それそのものの問題の当事者かというと、やはり少し違うだろう。ストレート

に言えば、釜の当事者は、カマのいわゆる労働者そのものに他ならない。しかし、彼らのほとんどが、その当事者意識を持っていないということがある。そのことゝ関連して活動者たちの存在が出てくる。そして活動者をストレートにカマの労働者そのものとは言い切れない意味において、当事者であろうとするものと、当事者たりえないものとをあわせもった微妙な立場でゆれうごいているといった気がする。そのような微妙な活動者の立場は　それだから　カマの外側の人たちに対する当事者意識となりときには助っ人を拒否する態度となってあらわれるのではないだろうか。

ところが　じゃあといって　その当事者ぶりはと言えば、（私は医療のみに限定してしか言えないが）例えば、「なぐってでもつれていく」ということばの、きびしい当事者同志的なつきつめ方　そのカッコヨサに反して、（人手不足、あるいは能力不足があるにせよ）テント村でそのことをつねにやろうとしていたかといえば、しどくあいまいだったとしか私には思われない。一方、私といっしょに医療センターにいった人たち――労働者は、彼らがまさにカマの当事者であるはずなのに、「お世話になりました。」などといって、私に深々とあんども頭をさげたりする。

これは、いっしょにテント村をやっているというよりも、常に世話する↓世話されるという固定的な関係を示すものだ。このような状況、あり方は、私がいっしょにやっていく上でとてもやりきれない問題をつくり出すと思われた。実際のところ、私はただセンターに病人をつれていくというだけで、それ以上の関係をつくりだすことは全くといっていいくらい出来なかった。私は、わりあいと自分ではふだんはざっくばらんなたちだと思っているんだけど、ここでは、ことばづかいひとつにしてもへんにていねいになったり、わざとなれなれしくなったり、なんやへんなぐあいで、全々ふつうにできないのだ。そのことは、みんなといっしょに雑炊を食べることも出来ない　問題にもいくらか関係している。

ここまで書いてきて、「釜」という問題にかかわりをもつことに、私はほとんど絶望的な気持ちになってきた。

これは、後日談になるが、四月の二十三日、梅田にケーテ・コルベッツ展を観にいって帰ってくると、サルートンの入口に五十半ばのかんじの労働者ふうの男が立っている。

「あなたをよく存じています。センターには佐々本さんの見舞に見えてましたね。私は十五日に退院したんですが・・・・」

そう言われても全々知らない人だ。少し酒臭い。私は越冬が終ったあと、週に一度くらいテント村からセンターへ入院した人を見舞に行っていた。あの破傷風の佐々本さんと同じ病室にいたということだから、その時にでも顔を見ていたのだろう。

とにかく一方的な話しぶりで、退院はしたが、肝硬変はまだ相当に悪いこと、引越したいこと、九州にちょっと帰ってくる間荷物をあずかってほしいことなどをのべてる。

「私Kと申します。戸籍謄本があります。・・・あの、お願いします・・・市大病院よこのアパートですから、ここからすぐです・・・すみません・・・よろしくお願いします。」の連発である。と思うと、せきたてるように、「では・・・」ともう自分は表へたって待っている。

この人なんという人なのかしらと思ったが、半分これもいきがかりで仕方がないという気になって、私はMさんに手伝ってもらって彼のアパートにいくことになってしまった。

彼は病人なのか、あまり何もしない。ほとんどMさんが荷づくりをして、ふとんは後で取りにくることにして、雨の中を三人が荷物をかついで歩いてサルートンへ。

おかげでサルートンの入口の部屋は、荷物がはいっていっぺんに犬小屋みたい。

Kさんは、その夜はMさんが紹介したドヤにとまった。そして明日朝はやくアパートを引上げた権利金二万円を旅費に九州に帰るはずだった。ところが次の日やってきて、すぐに立つといいながら、着がえのせんたくものが乾かないとか、もう少しキチンとしなければ帰れない、とか言ってぐずぐずしだす。Mさんは、とうとう新大阪駅まで見送っていった。

一週間か十日、九州の実家に滞在して帰ってくるといっていたKさん。三日目の夕方にふらりとやってきた。

「帰ったら高校生の息子に『まともになったら、いつでもカアチャンば抱かしてやる』というて、ぐいと、つまみ出されましたバイ」

酒臭く、よっぱらっている。

「すんません。いろいろおせわになります。ちょっと体の具合が悪かですケン・・横にならしてもらいます。」と上り口でねころがってしまった。

その日は目がさめると、Mさんに言われて案外あっさり帰ったが、数日たつと顔を出す。とくに悪意はなく、金も一度電話代二千円かしてくれと言っただけだが、ともかく入口へ上りこんで、ひとりごとのように一方的に話をしかけてくる。そして、「すんません。よろしくお願いします。」という。一体何をよろしくしたいのか。

目の前にKさんがいない時は、病気も治る見込みがないようだし、つい飲まなくてはやりきれないだろうなとか、飲まずにはここへもやってこれないのだろう。そして一方的な活しぶりは、相手になる仲間がすくないせいだろうとかいろいろ思ったりするのだが、いざ酒くさいKさんを見ると、私など、もうイライラしてくるのだ。

いきがかりだから、最低限のできることはやりたいと思ったのだが、しかし、だんだんとこんなかんじで、たびたびやってこられると、・・・

「てめえ、自分のことぐらい自分でやれ」ってどなりだしたくなる。

食えない立場にいる人が、どのような食い方をしようと、ともかく食っているものとして私などがそのやり方をとやかく言えるものではない。しかし、実際に泊めろ、食わせろと言ってきた時、どうするのか。芭蕉のように「汝が性の拙さをなけ」と路傍の赤児をみすてて立ち去る以外どうしようもない　というのが結局の行きつくところだとすれば　むしろ一日二日偽善的な気休めの世話をするだけなら、はじめから相手にせず放り出すということなのだろう。

しかし、Kさんがやってきた時、それまで一貫して「助っ人」であったテント村の私の延長として（それほど意識したわけじゃないけど）、ほとんど軽薄に彼を受け入れることになってしまった。

こんなかんじで、いつも軽薄に手を出したり、でしゃばったりするのは、理クツとか判断によるのではなく、ほとんど私の日常的な性格というか、くせみたいなもので、さけがたいもののようだ。こんどからはもっと慎重になろうと思っていても又やってしまう。

だから、かんじんなのは、その受け入れ

方、やり方の問題で、そのことを考えざるをえないし、私にとってはそれが限定的、条件的助っ人ということなのだ。

つまり、まずはじめに、私が出来る範囲を自分自身に対してはっきり限定すること。その上で、それを相手に条件として示すこと。「これだけしか出来ない」ということでやるということしかない。

だからKさんに対しては、まず最初に、「荷物をあずかるだけで、それ以上のことは何もできない。お金を貸したり、病院や福祉事務所へたのむことなど助ける力はない。」とはっきり念をおしたのだった。

ところが限定的条件的といくらいってもこのような関係は、もともと助っ人の方から求めてつくったものでないから、しばしば相手側のずるずるべったりでの居坐り的依存、つまり一方的関係へと流れてしまいがちである。

私はKさんの助っ人であって、Kさんそのもの、あるいは当事者ではない。にもかかわらず極端に言えば、その夜のねぐらなど心配しなければいけないようなところまで相談でもちこまれてくるーとすれば、もうどうしようもなく困ってしまう。逃げ出すより仕方がないわけだ。

そこでは最初の助っ人的親切、やさしさは一変して残酷で無残なものとなってしまう。「終り悪るければすべて悪し」で、へたをすると恨みさえ買いかねないという破局が来る。そうでなくても、無限定な世話するもの、されるものという一方的な関係が発展すればするほど、それは「やりきれたものじゃない」ことによって、いつか一方の側から打切られることは火をみるより明らかである。

私の限定的条件的助っ人は、そのような危険（？）をはらんでいた。そしてKさんがずるずるとこちらへはいりこんで来ることに対して、私のやり方の未熟さがほとんどヒステリーを誘発しそうにまでなったのである。

（その後の経過をいえば、これをタイプしている六月三日にも夕方フラリとたずねてきて、KさんはY病院に入院することができたこと、これからも月に三、四回はサルートンを訪ねてきたいのでよろしくという。まえにお金を借りにきた時、酒をのんできたら内へ入れないと強く言ったものだから、来るときはかなり自制しているらしい。きょうなどはスイカなんか手みやげにもってきた。一方的で独善的な話しぶりもなくなって、きょうのかんじからすると、だんだんふつうに相互的な関係でつきあうことができるような気がしてきた。

最初の「みずしらずだけど荷物だけはあずかる」（私が決して負担とならない程度の条件）ということを通して、関係を続けていくということにKさんも同調してくれたような気がする。）

ところでテント村では大半の労働者にとって、設営した側とそれを利用するものとの関係としてはっきり分れていた。つまり一方的関係だったように思われる。

だからUくんが十日の日私に、「ここには闘いがない。続ける意味がない」といったのは、もうやりきれないということでの一方の側からする関係の打切りを意味するものだろう。

またIクンの「やり続けること、これほど不親切なことはない」「誰にもたよらず自分の足で」ということばは、日頃の釜の人たちとのつきあいの中で、実行委をたより、あまえてくる人たちとの対応のなかからでてきた、たよられる側からの思想であって、当事者としてのものでなかったのかもしれない。

そのことは、期間中、精力的に出しつづ

けられた「日刊えっとう」の紙面全体からうける印象と句調にも感じられるものだ。

それだから、このKさんのことを聞いた私の周辺二、三の人たちには、私とKさんとの関係と成行きが、すこぶる注目の的となったようだ。

その人達およびカマの活動者一般の常識から言えば、はじめから相手にしない、かかわらないということになるらしい。

だがKさんの例をとってみても、Kさんには当然その労働者の仲間がいて、それぞれがわずかなことだろうが、お互に助けあっているらしい。助けあう—というよりか或は「くいあっている」のかもしれないが、ともかく相手にしないという形ではない。それこそ当事者同士的関係がそこにあるといってよいだろう。とすれば、カマの当事者たろうとする活動者がこのKさんを相手にせず、「無自覚」なカマの労働者同士がKさんを疎外しないというとき、これはどういう意味をあらわしているのだろうか。

私はもちろん労働者同士のようなつきあいをKさんとはもてない。私はカマの当事者でない。

それにしても、その立場の相異をこちらの応待のなかでKさんに明らかにし、Kさんもまたそれをこちらのやり方として承認してくれることによって、関係は一方が悪意をもたないかぎり続けることができる—のっけから相手にしない—というのではなく、そのような関係こそあたりまえの在り方だ—と思うのはあまりに楽観的だろうか。

私のこんどの「釜ガ崎えっとうテント村」に対する観方は、まるで盲人が象をとらえるごときものであるだろう。が私がさわったその感触は、まぎれもなくその一部であることにちがいないし、私にとってはそれが私の「カマ」であった。

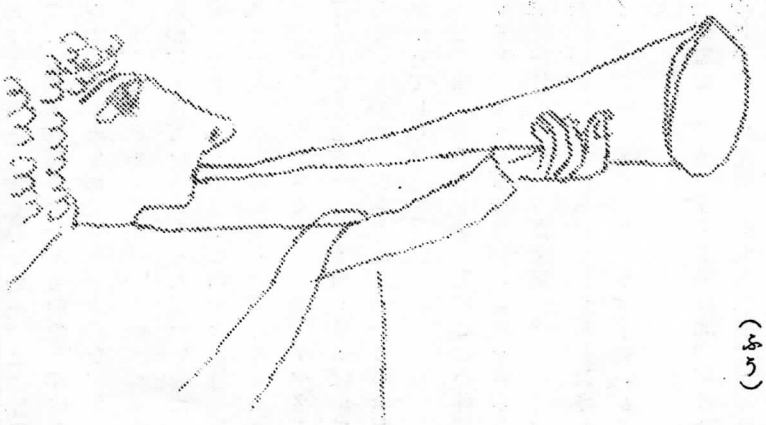
だからこのたしかな肌さわりをもとに考えを進めていくより手がないし、そしてもし釜ガ崎にかゝわる道があるとすれば、私にとっては、このようなきわめて限定的な助っ人の道しかない。

さらに我田引水的に言うならば、テント村に関するかぎり、活動家をもって任じている人たちも、むしろあいまいな当事者意識で闘うということでなく、はっきりと助っ人の立場でやりぬくことの方がいいのではないか、というのが私の感想なのだ。

たった八日間の「えっとう」助っ人が、私にとっては、いまこの（下）を作り終えた六月九日まで（なんと半年！）続いてしまったような気がする。

何となくまいってしまったので、助っ人にこれからいくとしても、いまのところは、正直なはなし、カマの助っ人は、もうこれっきりにしたいというかんじだナ。ああしんど。

（ふう）



日録抄

四月十八日　ホピの書、丸木美術館に行くために上京するつもりでこの日は犬山に一泊。夜中ゼンソクの発作。足もとフラフラで、上京をあきらめて大阪にもどる。

四月二二日　医療センターへ。佐々本さん退院したということを聞く。良覚さん食事をごちそうしてくれる。

四月二三日　梅田にケーテ・コルベッツ展とパステル展を観にいく。帰ると古賀さんという人が待っている。夜彼の引越しを手伝う。

四月二六日　交流塾に参加。浩厚さんの朝鮮人と猪飼野と私ということで会がもたれた。何重にも複雑な問題を聞きながら高明さんが言われた「具体的な内容がある限り、具体的に話をすすめていくならば日本と朝鮮の間に解決しない問題は、ぼくはないと思っています」ということを考えていた。

五月二日　半年ぶりにYくん大阪にくる。夜中一時久しぶりに八兵衛に三人で飲みにいく。Yくんのおごり。

五月三日　ジャガイモとニンニクをならべて絵をかく。

五月四日　朝六時におきて弁当をつくってMさん、Yくんと三人で吉野山へ。新緑がなんともいえず、きれいだった。

五月五日　夕方フラリと法隆寺に。モンペのはきごこちがとてもいい。

五月六日　Kくんちで八人ほど集まって宴会。みんなかなり飲んだ。私とKくん大論争。

五月十九日　FRI号の船長バーナードとエルザが帆の注文に来阪する。

五月廿日　午前中　バーナードは通訳をひきうけてくれたフイリップと帆の会社へ。私はエルザの案内役でひろこさん（通訳）とIBMへ。正直なはなし、私はなぜIBMなどにいくのかわからぬといったらエルザは、こういうところにこそいって話をしなくちゃいけないという。夜はバーナードの念願で、太平洋ひとりぼっちの堀江青年に会いにいく。ヨットマン同士でいろいろ話がはずむ。よこちょから聞いていると二人の話が面白い。たとえば堀江青年「そんなに古い船だったら維持するだけで金がかかる。帆だって木綿じゃなくていまのガラス繊維の方が水もすわないし丈夫で安い。たいへんじゃないか。新しいもので直したらどうか。」バーナード「とんでもない。このFRI号はとてもいい船だ。この船ひとつだけで博物館みたいなもので千年の人間のチエがこめられている。それをどうしてすてることがあるのか。」といった具合。

記録にかけている人とそれじたいをたのしもうとする人との違いなのかなと思った。

五月廿一日　名古屋によって、そのまま東京へ。よる、アベさんちに一泊。アベさんは二人目のこどもがあと十日もすれば出てくるというので、はちきれんばかりのお腹をかかえてしんどそう。

五月廿二日　百人委員会。私はここの仲間といると、とても気持ちいいものを感じる。

五月廿三日　沼津の山鹿文庫へ。

五月廿四日　静岡から来たYくんとMさんと夕方大瀬みさきに。思いがけずいいところだった。

五月廿五日　清水のFRI号訪問。明日からのドッグ入りをひかえてみなひさしぶりに活気づいているようすだった。

五月廿九日　ロングロングスカート、一着作制。

六月一日　いくちゃん、ジュン、ジュンの釜の友人三人をくわえて、友ガ島へ。とったカイをサカナにいっぱいやりながら、ひと騒ぎ。釜にはこんな層もある